
精霊使いのお願い

浅葱暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊使いのお願い

【Nコード】

N9437T

【作者名】

浅葱暁

【あらすじ】

精霊使いの学校に通うメイはあと半年で卒業を迎える。

しかし、使役精霊が一体もないメイはこのままでは卒業ができない。卒業をする為、精霊と使役契約を結ぶためにメイは美貌の上級精霊エルと賭けをする。

『賭けに負けたら、私の花嫁になってくださいね』
はたしてメイは使役精霊ができるのか――。

始まりの賭け

頭上を覆う数え切れないほどの葉から生み出される木陰。

キラキラと木陰から差し込む柔らかな光。

時折吹く柔らかな風。

その風によって木陰を作っている木の葉のサヤサヤという音。

樹齢四百年と伝えられているこの大樹の下は一人で昼寝をするにはうってつけの場所だ。

ここは王国都市スツエにある精霊学校の裏の山。この山には樹齢何百年という大木がそこに生えている。都市と言えば聞こえはいいが、はつきり言って田舎だ。

木陰に入り葉が出す音を聞きながら暫く目を閉じていると、次第に体がふわふわして眠くなってきた。

昨日は夜中まで課題をやっていたから寝不足気味なのだ。

——少し寝たら寮に帰って課題の続きをやらなきゃ——意識が途切れる間際にそう考えていたら草を踏む人の足音が聞こえてきた。

近くまで来たら寝ているのが判ったのか、足音が少し小さくなった。どうやら起こさないように気を使ってくれているようだ。

足音は私の頭の方まで来て聞こえなくなった。

なんだか見られているのは気のせいだろうか。起きなくてはいけ

ない。でもウトウトとしていた私の体はそう簡単に動いてくれない。

——見られている——そう思った瞬間、柔らかな風が吹き花のような甘い香りがしてきた。

頭に手が添えられ、髪を撫でられた。左手も握られているようだ。

私が昼寝をしていると声も掛けずにこんな事をするヤツは一人しかいない。

このまま寝ていると何かされそうだ。

自分を叱咤^{しった}して頑張って目を開けてみると、至近距離で黒くて長い睫毛^{まつげ}に縁取^{ふちど}られた閉じた目が近づいてくる。

「——ひいっ！」

昼寝から覚めたら自分の眼前に目があるだなんて誰が想像しているだろうか。とっさに乙女にあるまじき「ひいっ！」だなんて悲鳴と共に強力な右パンチが出てしまった。

バキッ！

「痛っ！」

目の前に居たヤツは頬を擦りながら、長い睫毛^{まつげ}に縁取られた黒い瞳を妖しく輝かせている。

何かをたくらんでいる目だ。

「メイさん、酷いです。優しく起こそうとしてたらいきなり殴るなんて。ああ、キズものになってしまいました！責任取ってください。今すぐお嫁にきてください！」

私の両手を取り顔を覗き込んでくる。

形の良い唇が三日月の形になり『さあ、誓いのキスを』と言いながら顔が近づいてくる。コイツと知り合って三年が経つが、いつもこんな感じだ。

「嫌！キズどころか、赤くもなっていないし。」

相手の手を払い、持ち前の瞬発力で1メートルは離れる。

私の言葉を聞いたとたん「即答しなくても……………」と言いながら、もの凄い勢いでうなだれる。ウサギの耳があったら絶対垂れてるなって位うなだれている。

コイツはこれでも上級妖精らしい。キズができたとしても、すぐに治るだろうに。

上級精霊ともなると軽いキズは一瞬で治り、人型が取れるようになる。

すらりと伸びた手足。黒檀こくたんのようなつやのある少し跳ねた綺麗な髪。シミ一つないきめの細かい肌。そして黒曜石のような黒い瞳。瞳を覆う長い睫毛。女性ともとれる整った顔立ち。はじめは女性と思ったがコイツは性別上、『男』だ。

精霊は魔力が大きい程整った顔になるそうだ。たしかに人間ではありえない顔立ちかもしれない。見とれてしまう。

見とれていると、目の前にシルフが飛んできた。シルフは私に気付くとなぜか一目散に逃げ出してしまった。心なしか青ざめて、泣いていた気がする……………。

シルフはこの大樹のそばに住む風の下級精霊だ。精霊使いの能力が無くても見る事が出来、精霊使いは必ずと言っていいほど使役している精霊のはず。

昨晩も課題の為にシルフを呼び出していたが、泣いて逃げられてしまったのだ。何度呼んでも同じで、お陰で寝不足だ。なぜ、私の

顔を見ただけで逃げ出すのか。精霊使いの才能が無いのだろうかと思っていたら隣から声がかかる。

「使役精霊はできましたか？最終課題に必要なんでしょう？まあ、シルフに逃げられているようでは出来ていないでしょうねえ。なんなら、お手伝いしましょうか？」

指を口に当てながらフフフと笑うこの男に頼めば楽かもしれない。お手伝いしてもらうには使役しなければ。

しかし私は上級精霊を使役できるほど実力が無いのだ。

卒業まであと半年。あと半年で精霊を使役できなければ卒業できない。もう一年最終学年のやり直しだ。留年するくらいならいっそのこと万年求婚中のコイツに協力してもらおうか。

精霊を使役する方法は二つある。

精霊を力で支配する方法と、精霊の名前を読み取って支配する方法がある。

実力が無い私は後者の方法で使役しなければならないが、過去何度かコイツの名前を読もうとしてみたが読めた事がない。『…………はあ』とため息が出る。

「知り合って三年の間に、アンタのこと使役しようと何度も企んだわよ。上級精霊は判るけど、名前はおろか属性も読めないのよね。」

ああ、言ってる空しくなる。属性が読めないなんて、私の力がコイツの足元にも及ばないって事だ。

使役できる精霊は見ただけで名前が頭に浮かぶのに、コイツは全く名前が浮かばないのだ。

美貌^{びぼう}の精霊は私の頭に手を伸ばし、髪^みのひと房を取り口づけながら「当然」とばかりに魅惑^{みわくてき}的な表情を浮かべている。何かを企んで

いる妖しい表情だ。

「メイさん、私はとっても暇なんです。なので卒業までの半年間で賭けをしましょう。」

にっこりと笑い、私の顔を見ながら名案だと目を輝かせている。

「……………賭け？」

精霊は時に気まぐれにとんでもない事を言い出す時がある。もしかして、今がその時か？！

少し身の危険を感じた私は両手でギュッと自分を抱きしめる。

警戒感を出し始めた私を見ながら、髪から手を離し今度は肩に両手を置きだした。ちょうど向き合う感じだ。

「卒業するまでに使役精霊が出来なかったり、私の名前が読めなかったらあなたの負けです。素直にお嫁に来てください。……………あ、卒業まであなたの精霊探しのお手伝いはしますから安心してくださいね。」

——じゃあ、賭けの代償をいただきますので。——そう言っ
てヤツは妖しく微笑み三日月型をした唇を私のそれと合わせた。

「……………んんっ！」

精霊との賭けの代償は口づけ？！ 聞いたこともない。それに、
なんで嫁っ???

なんだか怒りがふつふつと込み上げてきた。ぐつとこぶしを握る。
唇は未だヤツとくっついたままだ。

握ったこぶしを思いっきり振りかぶる——今度はヤツの顔に当たることなくかわされた……………。

「そう何度も、殴らないでください。痛いんですから。」

颯爽と私から離れたコイツは、私の髪をまたひと房取ると口づけ
て『照れてるんですか？赤い顔のあなたも可愛いですね』なんて事を
言っている。

「殴られる事をしたのはだれかしらっ？私の顔が赤いのは怒りか

らよ！」

コイツは黙っていればイイ男なのに、見た目に反して中身は変な奴。

私の髪先をクルクル回し妖艶ようえんに微笑みながら、今後自分を呼ぶ時についてを話し出した。

「私を呼びたい時は……『エル』とでも呼んでください。私の通名ですが、あなたの呼ぶ声が聞こえたら直ぐに行きます。まあ、呼ばれなくても常に傍に行きますけど。」

それでは帰りますね。そう言って美貌の上级精霊『エル』は音もなく姿を消した。

大樹の下に残された私は、半年後の卒業計画を練り始めるのだった……………。

オルガの協力

王国都市スツエ。

王国都市と名前はいいが、ここは周囲を山に囲まれ都市を一步出たら田や畑、牧場が広がっているという静かな田舎である。国王のおられる首都はここから馬車で一週間はかかるところにある。

スツエは、二百年程前の精霊使いであった国王がこの田舎に来た時に『精霊や妖精、神気に満ちているこの地に魔道師、精霊使いを育てる機関を作る』との発言でできた都市である。

スツエの町はずれには精霊使いの養成機関『国立精霊学院』と魔道師養成機関『国立魔道学院』が並んで建っている。この二校は創立時から魔術研究と精霊研究において連携をとる為に、各学院生徒はペアを組んでいるのである。

メイは自分のペアであるオルガが少し苦手だ。

ふ、と隣で黙々と魔道具製作をしているオルガを見してみる。

少し日に焼けた小麦色の肌、低すぎず高すぎず形のいい鼻筋、少し目にかかる無造作に伸びた赤い髪、くりくりとした形の琥珀色の眼。いつもニコニコしている口元。出自は不明だが黒のローブに宝石をふんだんに使った装飾を見る限り、家柄がいいお坊ちゃんであろう。

「できたっ！」

オルガは手に持った虹色の眼鏡をグイッと私に突き出している。

「試作品なんだけど、これは精霊の名前が判る眼鏡なんだ。これでメイも精霊を使役できるようになるよ。試しに僕の精霊の名前を読んでみて！」

オルガが自分の隣に居る精霊を指さして、「この子を見てみて。」とニツコリと微笑んでいる。

オルガは魔道師の生徒なのになぜか精霊をたくさん持っている。勝手に精霊がくっついてくるらしい。

試しに、オルガの隣に立っている色白の見た目は十歳位の女の子を見てみる。女の子は私と目が合うと少し青ざめ、うっすら涙を浮かべている。

……はあ、またこの反応。いつも精霊は私と目が合うと怯えだす。

眼鏡を掛け、女の子を見ると不思議な事に頭の中にこの精霊の名前と上級精霊という言葉が頭に浮かんだ。

「——すごい！何この魔道具！」

驚きと共に、かすかな嫉妬心が沸き起こる……。

オルガは自分が思いついた魔道具を作れるという才能を持っている。そして、私がずっと欲しいと思っている精霊まで何体も持っている。

オルガの隣にいとどうしても自分がダメな人間に見えてくる。

私がオルガが少し苦手な理由だ。

「メイ、その眼鏡で賭けをしたっていう精霊の名前を読み取っちゃえば？その精霊がまだ誰にも使役されてないんなら、君が名前で縛ればいいんだよ。」

オルガには、この前の森での出来事を話してある。さすがに『賭け』の事は話して無いけど。

ニツコリと屈託なく笑うオルガは、早く精霊を呼んでよとせかしてくる。

「……う、うん……。」

いいんだろうか？

道具を使って呼びだすのは聞いたことがあるけど、道具で名前を読んで精霊を縛るだなんて……。

——はつきり言ってズルじゃない？ ——

——でも、コレ使わないとアイツの名前を知る機会がないんじゃない？ ——

眼鏡を見ると、私の頭の中でブラックメイとホワイトメイがせめ鬩ぎあいを始めた。

虹色の眼鏡を見つめてブラックメイの誘惑に負けそうになった時、甘い香りと共に肩にズシリとした重みがかかった。「会いたかったですよ、メイさん。」と言いながら後ろから抱きついてくる。

エルは抱きついたまま片手で私の持っている眼鏡を手取る。

「実は見ていたんです。いいですよ。コレ使っても。」

はあ？！見てた？！いつから！！

エルは私の心の声が聞こえたのか、ニツコリ笑って私の頬にチュツと軽く口づけをした。

「言ったでしょう？呼ばれなくても常にあなたの傍にいますけどねって。まあ……傍には居なくても常にメイさんがどこで何をしているのか判るようにはしてありますけど。」

「……………」

”ストーカー！？” そう思って固まった瞬間オルガも同じ事を考えたらしい。

「ぶぶぶっ！！ ストーカーじゃん！ 珍しい精霊ー！！ あははははっ！！」

オルガは机をバンバン叩きながら笑い泣きをしている。どうやらツボに入ったみたいだ。

「なっ……、ストーカーとは失礼な！ 私の妻になる人に変な虫がつかないようマーキングをただけですよっ！！」

「マーキング！！……あははははっ！ 動物みたいじゃん！ それに『妻』！ 精霊と人間が結婚できるわけないじゃん。完璧ストーカー！ もうダメおなか痛い、死にそうく！！ はははははっ！」

『妻』、『マーキング』この二つの言葉に固まって、二人のやり取りを聞いていた私の心のどこかで音がした。音で言えばブチッだろう。

その瞬間エルの手から眼鏡をはぎ取った。

「あ、メイさん。」

勝手に人の私生活覗いてたってことでしょ？ ふざけんじゃない。道具を使ってズルしようが、こいつ——エルを使役してやる。使役してこき使ってやる！！

眼鏡を掛け、抱きついてたエルをはがし少し離れて睨んで見る。

長い睫毛に縁取られた黒曜石のような瞳。黒い少し跳ねた髪。女性のような容姿。この前あった時と全く変わらない姿。

「……………」

おかしい、名前がわからない。さっきの精霊は判ったのに。

困惑しているとエルが両手で顔を挟み込むように持ち、眼鏡をスツと取る。じっと手の中の物を見たエルが黒曜石の双眸そつぼうを少し細めると、手の中にあつた眼鏡がバンツと音を立てて粉碎された。

粉碎された眼鏡を見てオルガは笑いが引つ込んだのか、クリクリツとした琥珀色の眼を見開き驚いている。自分が作った道具をいとも簡単に壊されれば驚くのも当然だろう。

エルはフッフと笑ってオルガに向き合った。顔は笑っていても冷たい瞳で。

「人間の子供ごときが作ったおもちゃなんかで、私の名前が判るわけないでしょう？」

オルガを一瞥するとメイに向かって「こんなおもちゃを信じているメイさんも可愛いですね。」と言ってメイの髪の毛のひと房を持ち口づける。

「それじゃあ、私は帰ります。メイさん、寂しいからって浮気しないでくださいね。」

メイの唇にチュツと音を立てて口づけると現れたと同じようにフツ、と消えた。

いきなり口づけされると思ってたなく、いい具合にゆで上がったタコのようなメイと、作った魔道具をおもちゃ扱いされたオルガを残して。

寒い部屋

精霊学院と魔道学院の生徒達が使う研究棟の一室。ここは南向きで窓の前に植樹された木によって強い太陽光が程良い陰りをもたらし、時折心地よい風が吹き普段はとても居心地の良い場所だ。研究室決めの時にくじ引きをするほど人気のある部屋である。――普段は。

今はとてもどす黒いオーラが部屋中に充満しており、思いつきり部屋が暗い。今の季節は真冬？とでも言いたくなるようなブリザードのような風も吹いて、正直言ってとても寒い。今は秋になりかけている季節のはず。

さっきのエルの口づけにより、暑くなった顔の熱もこの部屋の空気で極寒の風に吹き飛んだ。

この部屋をこんな事にしたのはオルガである。彼は先ほどエルに粉碎された眼鏡の残骸を持ち、何やら「おもちゃ、おもちゃ……。」などと、ぶつぶつ言っている。表情を見る限りとても怒っているようだ。普段はニコニコして周囲を惹きつける甘めの顔も、今は眼を細めて彼の心を表すが如くブリザードを発生させ、体中からどす黒いオーラをゆらゆらと発生させている。

「さ、寒い……。」

歯をがちがち鳴らし、自分を抱くように手で腕を擦る。秋になりかけなので私は薄手の長そで一枚しかきていないのだ。

なんだか部屋の隅っこが凍ってきている気がする。このままでは部屋の中がとんでもない事に！精霊を呼び出す為に書いた魔法陣三年分が……ああ、自分の部屋にコピー取っておけばよかった――。精霊――！精霊と言えば……オルガの精霊にとめてもらおう。部屋中を見回し、精霊を探す。

「……居ない。」

——逃げたな。ちくしょう……。こうなったら……。

「ごめんっ!! オルガ! 明日、何でも言うこと聞くから許してっ!!」

近くにあったオルガ愛用の木製の魔法杖を握り、振りかぶりながらも、少し力を抜いて——彼の頭めがけて殴る。

ガッ!!

頭の頭頂部に当たり、バサリとオルガが倒れた。同時にブリザードの様な風も止んで、静かになった。

大丈夫だよね。死んでないよね。力加減したし。

オルガに触りながら息があるのを確認してホッとする。殴ったところ^{まっげ}に手を当てて確かめると大きいコブができていた。

「うわー! 痛そう……。ごめんね、私が魔法使えたら殴らなくて済んだんだけど。」

コブを撫でていたら赤く長い睫毛^{まつげ}が動き、ゆっくりと琥珀色の瞳が開かれた。

「……んっ……。痛いよ。」

片手で頭を押さえながら時間を掛けて起き上がると、椅子に座り部屋の惨状を見回し少しバツが悪そうな顔をして謝る。

「ごめん、ね? 僕って自分の作った魔道具を馬鹿にされるとキレるらしくって……。」

さっきの冷酷な表情とは打って変わって、ちょっとウルウルした瞳が可愛らしく上を向いている。

座ったオルガの顔は私を見上げる感じになっている。ウルウルした上質の琥珀のような瞳で上目づかいに謝られると、可愛すぎて怒

れない。少しドキッとしてしまう。

なるほど、精霊たちはこのオルガの瞳に魅せられているのかもしれない。

この綺麗な瞳に……。

……。

……。

「……メイ？」

はっと気付く。

あ、あああああ！見つめてしまった。しかも結構長い時間。恥ずかしいと思ったとたん、体中の熱が顔に集まったかのように熱くなる。

「い、いい良いのよ気にしなくて！！……部屋がちょっと暑かったし、ちょうどいい感じの室温になったわ。あゝ涼しい！！ありがとう。あは、あはははは。」

俯きながら両手を前に出し大きく振り『気にしないで』を必死にアピールする。

ダメだ。恥ずかしくてオルガの顔が見れない。……逃げよう！うん。こんな時は逃げるに限る。

「わた、わた、私少し疲れたから寮の部屋に戻るね。へ、部屋はそのままでもいいから！うん。」

「え？」

どもりながら後ずさり、ドアノブに手を掛けすばやく開けて研究室から逃げるように飛び出した。

メイさん混乱

精霊というものは人間のプライバシーなんて考えないのだろうか。

今日は何だか精神的に疲れたので、もう休もうと思って寮の自分の部屋に帰ってきた。

扉を開けてびっくりだ。いきなり目に飛び込んできたのは、さっき「もう帰ります。」と言って帰ったはずのエル。エルは私のベツトに彫刻のように座^ざしていた。少ししか見ていないが、迂闊にも綺麗などと思ってしまった。

いきなりエルが居るとは思わず、部屋を間違えたと思い扉に貼つてある自分のネームプレートを見て確認してしまった。……何かのコントみたいだ。

再び扉を開けると、待ってましたとばかりに笑顔でエルが両手を広げて出迎えている。「おかえりなさい。」と言いなながら。

とりあえず「ただいま」と言った方がいいのか、それとも何で私の部屋に居るのか聞いた方がいいんだろうか。それともさっきのオルガの事を話した方がいいんだろうか。「アンタが魔道具をおもちや扱いしたからトンでもない目に遭ったわよ」って……。それともその両手を広げていることを……。それとも……。ああ、突っ込みどころ多すぎ！ムカムカしてきた。

——フウと息をつき、とりあえず気を落ち着ける。

「——タダイマ。」

もの凄く棒読みで不機嫌オーラを滲ませながら帰宅の挨拶をする、と、エルの広げていた両手を横目にすり抜け勉強机の椅子に座る。きっと今の私は眉間に深い皺が寄っているだろう。

「ふふふ。大変でしたね。——こんなに冷えて。」

エルがギュッと後ろから抱き締める。エルの持つ独特の甘い香りと体温が伝わってくる。

……ああ、温かい。

さっきのオルガのブリザードのお陰で、もの凄く冷え切っているのだ。今はこのセクハラまがいの行為も許せてしまえそう。

いや、まてまて。そもその原因はコイツの要らない一言だった気が……。

「——そうだった!!」

バツと立ち上がり、後ろに居たエルの胸倉を掴み引き寄せる。

「私がこーんなに冷え切ってるのはアンタの要らない一言のせいなんだからね!! どうせまた、どこから見てたんでしょ? お陰であの部屋はぐちゃぐちゃじゃない! どうしてくれるのよっ。責任を取りなさいよ!!」

エルの胸倉を掴み私の目線まで引き寄せ、ブンブン振り回しながら睨み見る。

エルは揺らされながらもニコニコ笑っている。……何故かとても楽しそうだ。

「あの少年は年齢の割に潜在魔力が強いみたいですわね。だからあんなおもちゃのような魔道具で、まあまあ高等の精霊を読めたんですよ。おもちゃに魔力を大量に入れ込み道具にするだなんて、彼だからこそ出来たことです。それにしても、感情によっては魔力が暴走するだなんて残念ですね。……しかし、惜しかったですね。私の名前が判らなくて。」

「それをきちんとオルガに言ってあげてたらこんな事態にならないでしょうがっ!! お陰だけがさせちゃったわよ!」

「——ブツ……フッフッフ」

オルガを殴って気絶させた時の事を思い出したのか、エルは襟首を掴まれて振られながらも笑いだした。

私は魔力はあるけれど、なぜか魔法が使えない。この学院で魔法が使えないのは私くらいなものだ。魔法が使えたらオルガが暴走した時に殴って気絶させるんじゃない、魔法でとめてあげれたのに。

——それなのに……！

「笑うだなんて酷いっ！こっちは魔法が使えないから必死だったのよ！殴った時は死んじゃったって一瞬思っただけで怖かったんだからっ」
エルは襟首を掴み、睨みながらも眼がぼやける感覚に耐える。瞬きをすれば眼にたまった涙が流れ落ちそう。コイツの前で泣いてなるものか。

「——メイさん……。笑ってしまっすみません。」

エルが少し困ったような顔をして両手で私の頬を優しく包み、瞳にたまって今にも零れ落ちそうな涙を唇がすくい取る。何かの誓いをするみたいにくつくりと両方の瞳にエルの唇が触れる。きつと一瞬の行為だったはずなのに時間がゆつくりと流れているような感じがする。近くで見るエルの黒い双眸にハッと我に返るとなおも近づいてくるエルの唇を手で押さえる。

「——っ。今、何をしようとしたの？」

じつと警戒心をあらわにした私を見て、少し色気を含んだ艶のある笑いを見せる。私の頬を包んでいた手を離し、エルは自分の口を押さえている手を握りとり私の手のひらに口づけると再び顔が迫ってきた。

「何って……、泣いているお嫁さんを慰めるくちづ——」

エルが全部言い終わる前に足を思いつき踏みつける。ダンツと音を出しながら。今日は靴底が固いのをはいているからさぞや痛いだろう。雰囲気はただ飲まれる私ではないのだ。

結構痛かったのだろう。若干顔が引きつっている気がする。

「痛っ！メイさん酷いです！……ああ、痛くて足が動きません。もうそろそろお暇しようと思っていたんですが、足が痛いので今日はこちらに泊ってもいいですか？」

「誰が嫁だ！魔法でも使って痛みを消して、お早くお帰りくださ

い。」

「うう……。メイさんの事なんですがね……。」

足を痛がるエルを横目に、机の棚からこの間図書館で借りてきた精霊図鑑を取り出す。本を読んでいるふりをして少し考えてみる。

どうしていきなりこの部屋に居たのか気になるが、なぜ『嫁』！まだ賭けには負けてないのに！！

絶対にコイツを使役してやる！

この図鑑にエルのことが載っていないだろうか。図鑑の最初のページにはピラミッド型の精霊の組織図が描かれている。精霊は大きに見て四層構造になっていて、一番下の数が多いのは下級精霊、下から二番目が中級精霊、下から三番目が上級精霊、一番上がそれぞれの属性を束ねる精霊王となっている。

精霊使いを指摘すなら誰でも知っている基本の構造を頭に浮かべ、チラッとエルを見てみる。

もう足が痛くないのか、机の傍にあるベットに座りニコニコとこちらを見ている。そうだ、帰れと言っても帰るヤツじゃないんだ。

「メイさんはそんなに私の事が知りたいんですね。……。本当は私の事を知っているはずなのに。人間は面白いですね、頭の奥底に自分が欲しいはずの記憶を眠らせておくことができるだなんて。」

えっ！？

ええええ？？

「……今、なんて？」

思いつきり眼を見開きエルを見る。

ニコニコと笑っているその口から紡がれた言葉が真実なのかいささか疑問だが、その言葉が真実なら私はエルの名前を知っていることになる。

エルはニイツと妖しく微笑み私を見た。

「メイさんは私の名を……。私の事をすべて知っていますよ。――忘れてますけど。」

メイさん怒る

「——どうゆうこと？」

私がエルの事を知っているだなんて。

さっき聞いた一言が頭の中を巡る。

私がエルと知り合ったのは三年ほど前。ちょうど精霊を捕まえる実習が始まった時だ。それまで入った事の無い裏山に入り、道に迷って困ってる時に知り合ったはず。でもその時に名前なんて聞いてない。その時はからかわれて蔑まされて、あまりにムカついたからエルを殴りつけて学校まで送ってもらったわけ。それ以来、私が裏山に行くとき必ず出てくるようになった。——何故かいつもプロポーズのオマケつきで。

エルの長く綺麗な人差し指が私の眉間を押しながら、少し困ったように、でも蠱惑的に笑む。

「言った通りです。メイさんは私のすべてを知っていますよ。わざわざ友人に道具を借りたり調べなくてもね？　あなたが私をこの世界に呼び寄せたんですから。」

私が呼び寄せた精霊……、でも覚えてないだなんて。

未だエルの腕の中に居る私はジッとエルの顔を見上げ思いだそうと試みる。

黒く長い睫毛に覆われたとても上質の黒曜石の様な双眸、黒檀の様な艶のある髪、人外だからこそその整いすぎた容姿。そして、何とも言えないこの魔力が垂れ流しみたいな気配。絶対に一目見たら忘れるわけない。

……忘れるわけ無いのに、思い出せない。

なんてもったいない！

コイツを使役できる情報を忘れるだなんて、私のど阿呆！！

「フッフ。私が思い出させてあげてもいいんですけどねえ。そうしたら、メイさんが忘れていた事もたくさん思い出してしまえますね。それに、自分で私の名前を読まないで賭けはあなたの負けですよ？」

さあどうします？とでも言いたげな試すような視線をこちらに向けている。

その視線を受けるように私もエルの黒い瞳を見る。……『賭け』私が負けたらコイツの嫁になるというやつか。

思えば、エルの双眸をジッと見ながらこんな至近距離で話した事があっただろうか。——たぶん無い。私はいつもエルの瞳を見ないようにしていたのだ。見てもすぐに私の方から視線を逸らしていた。黒い双眸からは感情が読めず、何か得体のしれない感じがしていたのだ。

三年前に会った時にもコイツの瞳は私を試す瞳をしていた。今現在も何かを試しているような気がする。いつも柔らかな物腰で接してくれて、三年前からコイツは私を欲しがっているが、恋愛感情で欲しているのではないというのがその瞳から判ってしまった。

——試されている。

勝手に試されるのは好きではない。だったら私の少ない矜持にかけて受けて立ってやろうじゃない。

私はエルをまっすぐ見て、静かに宣言した。

「忘れてるなら、アンタの力を借りずに思い出すわ。——エル、賭けは止める。昔、呼び出せた力があったのなら今もあるはず。だ

ったら、残りの学生生活で……いや、留年してでも、アンタを使役してみせるわ。」

宣言を聞いたエルは、眼を細め妖しく微笑むと自身の腕の中に未だいるメイを少し力強く抱きしめた。

「はあ？」

まさか、あの宣言でギュウとされるとは思わなかったメイは素っ頓狂な声を出してしまった。すると、いきなり少し開いたメイの唇にエルのそれが重なる。いつもされる軽い感じではなく、今回は深く。

「！！！」

メイの上の歯列をなぞるようにエルの舌があたり、メイの舌を追うようにエルの舌がメイの口腔内を蹂躪していく。

なんでこんな事に！？さっきの発言のどこにこんな事になる要素が！！？

わけもわからずいきなり深い口づけをされて、力が抜け若干パニックになりながらもメイは自身の拳をあらん限りの力で振り上げた。

——バキィッ！！！！

とてもいい音がしたと思ったら、エルがよろよろと少し距離を置いた。

「！！痛いですっ！メイさん、いきなり何するんですか！！」

「それはこっちのセリフだっ！！色ボケ精霊があ！！」

エルは右目の下に当たったのか、うっすら赤くなった部分をさす

るように手を当てている。

「色……。それは酷いです！あなた一筋なのに。さっき、あんなに熱烈な告白をしてくれたばかりなのに！」

「告白？？——そんなモノしてないわ！！」

「さっき言ってくれたじゃないですか？『人生を掛けて使役してみせる』って。いやあ、あまりに嬉しくって……」

「言っていない！言ったのは『留年してでも』だ！勝手に脳内変換するなああっ！」

「今のメイさんじゃ私を使役する力は一生ないです。言いきってもいいです。だから、一生わたしと一緒に居てくれる^{イコール}お嫁さんになってくれると思ったんですがね。」

『お嫁さん』、『エルを使役する力は一生ない』この言葉にピクリと反応してしまった。

何かを試していて、恋愛感情もない相手を嫁に口説くとはどんな意味があるのだろう。……。何かを企んでるとか？向かいに立って、少し困った顔で笑むエルは企みがあるようには見えない。

エルの企みよりも後者の言葉は私の心を抉った。

使役してみせると決めた傍から、お前にそんな力は無いと否定されたのだ。傷つかない人間がいるだろうか。静かな湖に波紋を一粒たらしめたようにメイの中でエルの発した言葉の波紋が大きくなっていく。

メイはカッと目を見開き少し距離が空いたエルめがけ、足を勢よく前に出した。——そう、蹴ったのだ。

足はエルの脛に当たり、先ほど殴られた顔より痛そうだ。今日は固い靴を履いているからなおの事痛いだろう。

「……っ！ああ、また！メイさん、暴力反対です！！手や足より先に口を「出ていけええっ！！」」

エルの言葉をさえぎり、メイは叫びと共に使えない筈の魔法を使っていた。——エルを自分の前から消す移動魔法を。

部屋に残されたのは、気付かないうちに魔法を使って気力を使い果たしたメイのみである。

静寂の思考（前書き）

お気に入りに登録してくださっている皆様、ありがとうございます！
今回はエル視点のお話です。

静寂の思考

ねっとり縛りつく闇の中に彼は居た。

音も無く、光が一筋も入ってこれない程の闇。時が流れているのかもわからない空間。

彼をここに飛ばしたのは、魔法が一切使えない筈の娘——いや、彼が魔法を使えなくした筈の娘。

娘が幼少の頃に彼を呼び出した時、彼は娘が言う『願い』の対価に娘の魔法を封印した。この自分を五つにもならない小娘が呼び出し、いとも簡単に名前を支配されたという屈辱から、何重にも頑丈な鍵をかけるように……。封印を施した彼にすら、解ける確率が半々といえる程頑丈で難しい封印だった。自分の事を思い出さないように記憶を消したのもこの時だ。

解けるはずの無い封印である。しかし彼は時間のある限り娘を見に行った。——娘に見つからないように。勝手に封印が解けてまた自分が支配されるという焦りがあったのかもしれない。

陰で娘の成長を見ながら、娘が精霊に愛される体質であることを知った。娘のもう居ない親がわりのように……。娘の周りには精霊が居る。彼はよくわからない苛立ちを覚えた……。

最初に見始めてから約十年の歳月が流れた。娘は『精霊使い』になるべく学校に入る。彼が絶対になって欲しくないと思っている職業である。彼はまた焦燥感に駆られた……。自分の事を思い出さなかったら？そんな思いが彼を捕える。

機を見て娘に会いに行った。自分の姿を見て封印が解けたなら、再び封印し、解けなければ監視しようと思……。娘が自分を見て

も何の変化も無かった。——だが、面白く成長していた。会って数分で自分を殴ったのだ。今まで自分に頭を垂れる人間は見えてきたが、殴りかかってきた者はいなかった。——氣にいった。この娘を一生監視および観察してやろうと考えた。それと同時に、独占欲が湧き上がってきた。

精霊使いは職業柄いろいろな精霊を使役する。彼はその中の一体では嫌だと思った。『この娘の精霊は自分だけでいい』そう思い唇にのせて呪いまじないを娘に施した。——精霊が寄ってこないように。娘も周りの人間も施された呪いに気づいていないようだ。

男はくっくつと喉を鳴らして笑いながら言った「鈍いにも程がある」と。

再開から三年程になるが、時折見せる娘の面白い行動は増し、常に傍に居たいと思うようになった。

娘の封印が解ける事は無かったが、封印が解けなくても魔法が発動した。魔法詠唱も陣も省略して。

娘は魔法を発動する前に自分を使役してみせると宣言した。普段は見ると事無きの瞳をまっすぐ見ながら……。今回は何故か歓喜の気持ちが湧きあがった。気付いたら口づけていた。いつもとは違う感じで……。

「さて、どうしようか？」

男は口を手を当て、フツと微笑んだようだ。

昔の感情とは些か違う自分の気持ちが奇妙だ。昔は監視の為に見ていたが、今は何故か見ているのが普通になっているのだ。三年ほど前から娘に一生、監視ができるようにとの考えを隠し「妻に」と言ってきたが、今は少し違う気持ちで言っている自分が居る。

男が考えていると、僅かに空間の空気が動いた。誰かが来たようだ。気配から相手が急いている様子がよくわかる。

「——エル様っ!! なんで『時の牢』に居るんですか!! いきなり気配が消えてかーなり焦りましたよ!」

男……エルはハアと小さいため息をつき、今ここに來た者を見やった。たぶん、側近のエンジュだろう。姿は暗くて判らないが、声と口調と気配がエンジュであると肯定している。

「メイにとばされた。油断したな、まさか牢屋に入れられるとは。」

エンジュはその言葉に目を見張った。

メイとは我が主人を一度は支配した小娘の事だ。主人の怒りに触れ、一切の魔法を封印されたはずでは? 封印の確認の為に娘の傍に居るとは聞いているが……。この主人を牢屋に送る力があるなんて信じられない、といった瞳を主人の居る方へ向ける。エルもその気配が判ったのか、苦笑する声が聞こえる。

「まだ、封印は解けていない。少し考え事をしていただけた、ここは静かだからな。」

さあ、帰るぞ。の声と共に二人の気配が消えた。

静寂の思考（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

誤字脱字、感想があればおねがいします！

まどろみの過去

夢を見た。

もう見たくない夢と思いながら何度も昔から見る夢を……。

親たちは私の小さな頭を撫でつけ、抱きしめ「すぐに帰ってくるよ。」と言って出かけて行った。

いつもの様に、母の妹である叔母が来てくれて一緒に留守番をしていた。

いつも叔母は、一緒に居る時は両親の昔話をしてくれた。両親がどんな仕事をしているのかを教えてくれたのもこの叔母である。

「あなたのお父様、お母様は宮廷召喚士。精霊、聖獣、魔法等を使い、王様やこの国を守って平和である為に必要なお仕事しているの。」

叔母が来るたびに教えてくれた両親の話は、当時五つにもならない子供の私でも誇らしかった。

叔母の話はとても楽しく、両親を待っているのも苦にならなかった。

——— 待っても、待っても帰ってこなかった。

何日か経つと、両親が帰ってきたと叔母が私を抱きしめながら言った。

両親は何故か箱の中で眠っていた。青ざめた顔をして、ひんやりとしていた。揺すっても、目覚めのキスをしても起きてくれなかった。唇に触れた両親の頬は冷たく、何故か涙かとめどなく溢れていた。叔母は両親にすがって泣き続ける私の傍に居続けてくれた。両親がもう起きる事は無いのだ、と納得するまで……。

泣き疲れて眠ってしまったのか、気付いた時は叔母の膝の上だった。見上げると、叔母は母の棺にもたれて眠っていた。

そつと叔母を起こさないように膝から起き、両親がいつも居た仕事部屋へ行った。

部屋の机の上には一つの写真立が置いてあった。写っているのは私と、両親。私はそれをギュッと抱きしめ、想った……。

声が聞きたい

どんな声でもいい、二人に名前を呼んでほしい
最後に一言でも二人と話したい

父様と母様の声を聞けるなら何でもするから

誰か、

神様でも悪魔でも誰でも何でもいい

———
だれか!!

その瞬間私の目の前に眩い虹色の光と共に一つの魔法陣が浮き出

した。一つの部屋が埋まりそうな程大きい。

何が起こったのか判らず陣を見つめていると、光の中から手が伸び私の首を掴んだ。

——そして、目の前には刺すような視線を送る黒い双眸……。

……。

……。

……。

うつすらと目を開けると、ぼやける視界に人影があった。その人は先ほどまで見ていた夢に出ていた叔母である。

叔母は思案顔をしながら私を覗き込んで「よかったわ」と微笑みつぶやいた。

夢の余韻で未だ残る首の違和感を触りながら、寝ていたベッドから上体を起こす。

「……あの夢をみてたの。」

昔から何度も見る夢だ。両親が亡くなった後数日見続けて、今もたまに見る。ここ数年は見る事は無かったのだが……。

「あの最後に首を絞められる夢？ ……なにかあったの？ さっきもあなたの部屋で、大きな魔力が動いたってオルガが言ってたからここに見に来たのよ。そしたら、あなたが倒れてるんだもの。驚いたわ！」

ああ、そうか倒れたのか。エルがいきなり消えてからもの凄く疲

れて、気付いたら夢を見ていた。

あれからの位時間が経ったのだろう。窓の外は真っ暗で数多の星が夜空を彩っている。

「―― エルが……この前話した上級精霊なんだけど、エルが『今のメイさんじゃ私を使役する力は一生ないです』だなんて言うからムカついて、蹴って怒鳴って……気付いたら今こんな状態に。でも魔法なんて使ってないよ？……使えないし。叔母さんも知ってるでしょ？」

叔母さんはそうねえ、と呟きまた思案顔をした。

母の妹である叔母は、両親が亡くなった後結婚もせずに私を引き取って育ててくれている。自身が教師をしているこの学院に入学させたのは、私が魔法を使用できるようにとの思惑もあったようだ。優秀な両親を持つのに魔法が使えない……。それどころか、魔法が使えなくても問題ない学院の方に入學してるのに、今は留年しそうな感じだ。なんだか申し訳ない。

「そんな悲しい顔をしないの。メイちゃんが頑張ってるのは知ってるんだから。『今のメイさんじゃ』って言ったのよね。もう少し何かが変わったらその精霊はあなたが使役できるって事じゃない？少し、策を練って見たらどうかしら。」

叔母の温かな手のひらが私の頭をポンポンと撫でる。すると鬱々としていた私の心が少し晴れやかになってきた。

策を練るか……。

「ありがとう。そうだね、策を練ってみる。」

元気が戻った私を見て叔母は安心したのか、あまり無理しないのよといって出て行った。

明日あたり、オルガに知恵を貸してもらおう。

お願いと

西日があたりを赤く染め上げる屋上に、長く影の伸びた二人の姿がある。

一人は座り込み、額を床に擦り付けている土下座という状態である。もう一人は座り込んだ人をどうしたら良いのか判らない感じで見下ろしている。

「――オルガッ！昨日はごめんなさい！！殴って気絶させちゃって……それに部屋の片づけまでしてもらっちゃって。」

額をグリグリと床に擦りつけている。見ているこっちが何だか痛くなってきた。

「メイ、そんな事しないですよ。我を忘れた僕がいけなかったんだし……君は悪くないんだ。」

そうなのだ、昨日悪いのはどう考えても僕。あの上級精霊クッセイレイに嫌な事を言われ、我をキレ忘れて二人で使っている研究部屋を氷漬けにしまった。

メイの腕をとり、立たせようとするがピクリとも動かない。確固たる意志があつて土下座をしているようだ。

「そう言ってくれて嬉しいわ。……あの、その……それとは別の話が……、とっても言いにくいんだけど、でも言わなくちゃいけない……。」

未だグリグリと額を擦りつけてこちらを見ないメイの傍にしゃがみ込み、覗き込みながら先を促す。

「うん。言わなくちゃいけない事ならきちんと聞くよ?」

「あの……。」

なかなか要領を得ない言葉しか出なく、顔を上げないメイにオルガの悪戯心が湧き上がってきた。

「あ、もしかして僕に愛の告白？それなら大歓迎だよ。今、彼女居ないしね。」

オルガの言葉にメイは「はあっ？」と気の抜けた言葉と共に困惑の表情を浮かべている。そんな事微塵も考えていなかった、といった表情である。メイと一緒に居て彼女に好意を抱いているオルガの心中はやや複雑である。

「——そんな嫌そうな顔しないでよ。誰もいない夕暮れの屋上に呼び出されて、呼び出した本人がなかなか本題を切り出せないなんて、誰でも告白と思うよ？まあ、土下座で告白っていうのは斬新だね。」

一瞬でメイの顔が真っ赤になるのを見て楽しんだ後、冗談だよと言いつクスクスと笑ってメイの手をひいて共に立ち上がる。

「そんなに言いづらい事？聞くだけなら聞くよ。でも、嫌だと思ったら遠慮せずに言うから大丈夫だよ。」

メイは意を決してオルガを見た。

「あの、お願いがあつて……。私どうしてもエルを使役したいの。でも今の私じゃ一生無理みたいで——だから力を貸してください。」

具体的にどう協力を求めて良いのか判らない。でも今の私にはオルガの力が必要なのだ。私に足りないのは、きっと魔法を使う力だから。そう思い、オルガに深く頭を下げた。なんなら、もう一度土下座しても良いくらいだ。

「…………。」

しばらくの沈黙の後、オルガが小さく息を吐いた。

「あのクソせ……いや、エルだったっけ。なんでそいつが良いの？どんな精霊でもいいから使役すれば賭けは君の勝ちで終わるんでしょ？だったら、下級精霊を捕まえればいいじゃない。」

クソ精霊と言いきなりしましたね、オルガくん……。

喉元まで出かかった言葉を、頼みごとをしているという自制心で飲み込み頭を下げ続ける。

昨日叔母さんが帰り、寝る前にやっぱりエルを使役できそうにないなら、他の精霊を使役して賭けを終わらそうとも考えた。でも、他の精霊じゃなくエルを使役したいのだ。——エルだけを。

三年ほど前から知り合って、慣れているといった理由でエルを欲しがっている訳ではない。何かを試されているからといった理由でもない気がする。よく判らないけれど、本気で使役したいと思ったのは彼だけなのだ。今まで、精霊たちが逃げて行ってもそこまで本気で捕まえようとは思わなかった。だから、今留年しそうなんだけれど……。

「——どうしても、エルじゃなきゃダメな気がするの。……だから、オルガの力を貸してください。お願いします。」

ああ、断られたら一人で策を練らなきゃいけないのか。魔法が使えない分、不利だなあ。いっそのこと転校して魔道師学校に行つて一から魔法の勉強しようかな……。いや、そもそも魔道師になったら精霊なんかいらないんじゃない……。その前に、勉強しても魔法が使えないし。ああ、堂々巡りだ。

頭を下げながら悶々と考えていたらオルガの笑い声が聞こえてきた。

「あははは！！人に頼みごとをしながら、断られた後の事考えないでよ。っていうか、考えてる事口からダダ漏れだよ。」

「えっ?! あっ、ヤダ」

口に手を当てて、目の前に居るオルガを仰ぎ見る。オルガは穏や

かな笑顔をしてメイを見ている。

「——もちろんいいよ。そんな風に頼まれなくても率先して力を貸すよ。僕は君と一緒に卒業したいし。それに、あの上級精霊^{クソせいいれい}がメイに屈服する姿も見たいし。」

話の後半になり、やや黒い笑顔になったのは気になったが、オルガが力を貸してくれる事になって、一安心だ。

昨日は考え事をしていてあまり眠る事ができなかった。

考えていたのは、私に足りないもの。

オルガには私が魔法を使えない原因を調べてもらおうと思っている。——私が今足りないのは魔法。

魔法が使えるのなら、エルを力ずくで従える事ができるかもしれない。

『対！エル使役攻略作戦会議』（前書き）

お気に入り登録していただいております！とっても嬉しいです。

『対！エル使役攻略作戦会議』

現在オルガと、この前氷漬けにされた研究室にて作戦会議を始めようと準備中である。

——もちろん『対！エル使役攻略作戦会議』だ。

この前消えて以来目の前には現れていないが、何だか今までのやり取りを聞いていそうで、エルに聞こえないようにこの部屋全体に結界を張っているところである。

結界石を部屋の四隅に置き、オルガが聖水で床に陣を描いた。そして彼愛用のネックレスにある媒介の石を触り呪文を唱えると、魔法陣から光が出て辺りを覆い隠した。

あまりの眩しさに目を開けていけない程だ。

しばらくすると光が霧状になり、若干膜につつまれている感じはするものの、いつもの部屋に戻った。

「……うう、何だか目がチカチカする」

「そんなに眩しかったかな？ 僕はなんともないけど」

——もうすぐ正式な魔道師になる優秀なアナタと、魔法に免疫があまりない私と比べないでください。

目を擦りながら、心の中で突っ込みいそいと会議の準備を始める。会議と言ってもオルガと私の二人だけだから、そこまで準備するものは無い。結界を張ったらお茶とお菓子を準備するくらいである。

「それでさ、僕は君に何をしてあげたらいいの？」
椅子に座り、お茶を一口啜ってから口火を切ったのはオルガである。

オルガにして欲しい事は一つだけ。それは、私の魔法が何故使えないのか調べてもらうことだ。今朝、授業が始まる前に学長や教師にオルガに頼まなくてもなんとかできないか聞いたら、「とても勉強になる事だから魔道師と相談した方がいい」と言われたからである。

「私が何で魔法が使えないのか調べてほしいの。……オルガも知ってるように、魔力はともあるみたいなんだけど、魔力があっても魔法が発動できないから」

精霊を力で支配する場合は、精霊が負けを認めるまで攻撃しなければいけない。殆ど^{ほとんど}の精霊使いは魔法で支配する方を選んでいる。理由は簡単だ。精霊は強い物に惹かれるから。

私は魔法が使えないから魔法陣から精霊を呼びだす事はできても、魔法陣を使って魔法を発動できない。だから精霊達が私の前から逃げて魔法を使って止める事ができない。

「メイは特殊だよ。魔法陣は使えるのに、魔法が使えないからね。普通は魔法が使えない人って、陣も使えないんだけど……何だか矛盾してるよね」

実は私もそれは考えていた。魔法陣も魔法と付くからには魔法なのだ。

オルガが燭台に置かれていた蠟燭を一本手に取り、付いていた火を息を吹きかけて消す。私の目の前に一本用の燭台を置きそこに先ほど消したばかりの蠟燭を立てる。

「今ここで、この蠟燭に火を灯す魔法を唱えてみてくれない？どうして発動しないのか、力のまわり方を見るから」

ニコニコと笑い、爆発しても僕が消すから大丈夫だよと付け加えた事は聞き流そう。

「わかった、やってみる」

そうは言ったものの、心臓はバクバクだ。魔道師の前で発動できないと判り切った魔法を使わなきゃいけないなんて……。恥をかくと判ってて実行する人間っているのだろうか。

机の引き出しから取り出した私の媒介——黒い石の指輪——を指にはめ、深呼吸をして気を落ち着かせる。指先に魔力を集中させ魔法陣を空中に描き、媒介の石を触りつつ、蠟燭の先端を見ながら呪文を唱える。

「明りを生み出す炎の輝きよ、今この蠟燭の先端に灯れ」

魔力が陣に流れ込み陣が赤く光った所で、消えた。光が消えるとともに陣も消滅した……。

蠟燭も消えたままである。

ため息をつきつつ肩を落とすと、オルガの指がパチと鳴り蠟燭に明かりが灯った。

詠唱無しで指一つで簡単な魔法を使えるなんて、オルガはすごいな。と思うと共に心の奥底で少しの嫉妬心が湧きあがった……。

「メイの魔法は途中まで出来てるね。ただ、君の力のすぐ後に別の力がかぶってきて魔法を消してる……ように見えたけど、何の力だろう。——それとは別なんだけど」

声が後半若干低くなり、いつもは甘さを湛^{たた}えている、琥珀色の目以外は笑っているといった黒い笑顔になった。何故か、目が笑っていない。……怖いですが、オルガ君。

オルガは黒い笑顔で私の指輪を指さした。

「何で媒介が研究室の机の引き出しに入ってるわけ？ 普通は肌身離さず持つてるよね」

黒い笑顔がニッコリ。つられて私も引きつった笑顔でニッコリ。あ、口の筋肉が引きつった感じが……。

笑顔に笑顔で返したら、すごく気まずい空気が漂い始めた。

指輪だから、持ち歩いてると失くしそうで……というか、魔法使えないから持っても邪魔な……

「持っても邪魔なだけ、とは勿論思っていないよね？」

ピクリ。思ってる事を言われて肩が少し張ってしまった。

魔道師って心の声まで読めるの！？とは思っても言えいえない。

「……オ、オモッテナイヨ……」

動揺して変な発音になってしまった私を見て、オルガは深い深いため息をついて、席を立った。

「媒介って魔法を扱う人間にとってはもう一つの心臓なんだ。だからそんな風に扱っちゃだめだよ。どんなに邪魔でもね。——わかった？」

言葉前半は困った顔で、そして言葉後半ではとても黒い笑顔で……。オルガは魔道師クラスで首席卒業が決まっている。それは魔法を愛するが故首席を取るのは必然であると言った方がいいのかもしれない。そんなオルガに「魔法が使えないから媒介って邪魔」なんて言ったらどうなる事やら。怖くて言えない。

「ワッカリマシタァッ!!」

ピシと右手揃え額の方へ持つて行き、何故か騎士や軍隊が使うような敬礼をしてしまった。

「うん。いい返事。」

クリクリの瞳を満足気に細めたオルガは、続きは明日とばかりに帰り自宅を始めた。

「今日見たメイの魔法を消す力の存在を、こっち《魔道師学校》の学長たちに相談してみる。」

卒業までの僕たちの最終課題ができたね、そう言葉を残しオルガ

は部屋の四隅に置かれた結界石を回収したとたん、膜に包まれた様な感覚がなくなった。結界がなくなったということだろう。

——もうすぐ、魔法が使えるようになるかもしれない。そうすれば……。

期待感を胸に抱き寮に帰るのだった。

『対！エル使役攻略作戦会議』（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

感想、誤字脱字等お待ちしております。

『対！エル使役攻略作戦会議』 2

——どうして、こんな状態コトになってしまったんでしょう。

今私の目の前には、顎から胸にかけて白く長い髭を生やし、穏やかながらも少し冷たさのある琥珀色の瞳を持つ老人が座っている。座っているからかとても小さく、可愛い小動物を思わせる。視線を隣にずらすと頭に角が生えた白い鬼のような巨漢が一人居た。こちらは眼力だけで人を殺せそうな、恐怖心を煽る生き物だ。——はつきり言うと、この部屋に居たくない。

どうしてこんな状態になってしまったんでしょう？

……先ほどから考えて居るけれどよくわからない。でも、思い出してみよう。

今朝はオルガに寮の前で呼ばれ、転移魔法でこの部屋にいきなり連れ込まれたのだ。連れ込んだオルガは「授業があるから」と言って去って行った。

私も授業あるんですけど……？

それに、ここはどこ？

オルガが出ていき部屋を見渡すと、この二人(?) 一人は小さいおじいさん、もう一人(?) は白い巨漢が居た。巨漢からはとても重い空気が発せられていた

そして、現在に至る……。

……。

……。

……。

沈黙が重い。

「ふお、主がメイさんかね？オルガが世話になっとるね。」

いきなりこんな所に連れてこられてどうしよう、と考えていると沈黙を破ってくれたのはおじいさんの方だった。

おじいさんは長い髭を触りながら、琥珀色の瞳を細める。

「あ、いえ。お世話になってるのは私です……。あの、ここ……」
どこですか？そう聞こうと思って顔を上げると、白い巨漢と目があつた。真っ赤な瞳がギロリとこっちを向いている。

その瞬間……、石になりかけました……。とある神話の髪の毛が蛇の女神が頭をよぎる程固まってしまった。

「これ、威嚇するな。お嬢さんはお客じゃぞ。——ああ、すまんの。こ奴は儂の神獣じゃ、お主の事をオルガから聞いて、用意しておいたんじゃない。」

——神獣！

こんな恐ろしい巨漢が？！何だかイメージとずいぶん違う。神獣はもっと神々しいものだと思ってたけど、こんな——

「ふおふおふお、この神獣は心の奥底まで読める。余計な事は考
えん方がいいぞ。」

「……スミマセン。」

なんだか、思っ**て**はいけない事を考えておりました……。

「……おわかりました。」

巨漢がおじいさんの頭に手をおき、おじいさんが目を瞑りながら
神獣の方を見た。何やらヒソヒソと話している……。

「……そうか、そうだったのか。成程のう。ふむ。」

ブツブツ独り言を言いながら私の方を見る。

ズンッ!!

——途端に空気が重くなった。

「すまんの。誰にも聞かれてはならん事ゆえ、多重結界をはらせ
てもらったわい。——あの神獣にお嬢さんの事を探ってもらった
んじゃが、お主はとある精霊から呪いのろいに近い封印を受けておるの。
こう、鎖でがんじがらめのような。それにいくつかの呪いまじないもあるよ
うじゃ。」

「——っはあ？」

一体いつの間にそんな呪いのろいなんか……。というか、いつの間に私
の事を探っていたんだろうか。横目で巨漢の神獣を見ているが、も
うこちらを向いていない。

「儂もまだ死にたくないゆえ、その精霊の事は言えんが……。そ

奴の行った事が原因で魔法が消されてしまうようじゃ。……ううむ、その呪いを解くことは本人しかできないが、多少なら薄められるじゃろ。」

死ぬ?! その精霊の正体を話したらこのおじいさんが死ぬという事だろうか。そんなに凄い精霊に呪われてるだなんて。一体、自分は何をしたんだろう。

「私は何をしてその精霊に呪われているんでしょうか? まったく覚えていないんですが……。」

「……覚えておらんのも道理じゃ。記憶が操作されておるのでは? じゃが、儂からはその精霊の事を一切話せん。呪いを薄めれば、その精霊も嫌でもお嬢さんの前に正体を現す事になるじゃろ。」

そう言うとおじいさんは机の引き出しから地図を取り出した。

その地図は、慣れ親しんだ学校の裏山の様だ。

地図の上辺りにペンで印をつけ、それを私に手渡した。

「ここに行けばいいんですね。でも、ここには何があるんですか?」

「そこは霊泉の滝じゃ。そこに行き、水を飲んだら多少は薄まるはずじゃ。じゃが、あくまで多少、何も変わらんかもしれん。着くまでに危険はあるが、行って損はないはずじゃ。」

おじいさんがニツと微笑むと部屋の空気が軽くなった。どうやら結界を解いたらしい。

地図をたたみ、持っていた学校のかばんにしまうと、お礼の言葉と一礼し部屋を出た。

出たところで、あの老人の正体が判った。扉に『総学院長室』と書いてあったのだ……。

「——総学院長だったの!？」

あの小さいおじいさんが精霊学校、魔道学校の二人の学長をまとめる総学院長だったと驚いた瞬間、嗅ぎ慣れた匂いに包まれた。――いや、抱き締められたのだ。同時に、頬に柔らかい唇の感触が当たった。

「とおーって也会いたかったですよ、メイさん。」

声を聞いて、エルだと確信した途端視界が手によって遮られた――。

エル、嫉妬する？

目の前には、人外ではありえない美貌の青年の顔。ある程度見慣れている、とはいっても私はこれでも思春期の女性だ。美形が吐息のかかる距離にいたら誰だって驚く。

さっきまで総学院長の部屋の前に居たはずである。なのに、なぜか今はエルの腕の中に居る。エルの声が聞こえたと思ったら何やら辺りが木に囲まれた少し開いた場所につれてこられたのだ。

「どこ……？ここ。」

この質問は本日二度目な気がする……。今日は連れ去られる日なのだろうか。せめて行き先を言ってから移動してほしいと思う。

エルから離れようとしても、がっちり腰に回された腕は外れそうもない。腕を外せと眼力を込めて睨んでも、妖艶な笑顔でかわされてしまった。

「『狭間の森』と私たちが呼んでいる場所です。メイさんの学校はあちらにありますよ。最近あなたに会いに行こうとすると、いつも結界に阻まれているので連れてきてしまいました。」

私の右側を指さしながら「すみませんね」と言っても、そんな風に思っていない顔が目の前にある。

「何の用？それでも最近忙しいの。——それよりも、離れてくれない？」

「絶対に嫌です！久しぶりに愛しい妻に会えたのに、なぜ離さなくてはいけないんです？あっ！もしかして照れて——」

口から出る言葉を全部言う前に、エルの美しい顔が少し歪んだ。彼の脛にはメイの長いとも短いともいえない少女独特の足があった。

「『妻』じゃないわ？第一、私の事好きじゃないでしょ。」

彼の黒曜石エルの様な瞳は私を見る時に愛情がこもっていない。目は口よりもモノを言う、といわれている。彼は口から愛しいと言葉を言ってもそうは思っていないのだ。黒い瞳は私を見ているようで、見えていない。

私の一言にも瞳に感情の色を入れる事なく、魅惑的な笑みで答える。

「あなたを見ていると離れたくない程、本当に飽きない。……好きですよ。——とても、ね。だから妻に、と言っているんですよ。」

エルの顔を見ずにこの言葉を聞いたら、彼が私の事を本気で好きだと思ったかもしれない。やはり、瞳には愛情が入っていない。私の姿を映すその黒い瞳には何故か負の感情が入っている。——怖い、そう思った瞬間、頭の中に何かの映像が一瞬浮かんだ。どこから覗く黒い双眸。夢の中に出てくる圧倒的な恐怖心をかきたてる瞳。それと磨かれた黒曜石の様に輝くエルの瞳と重なり、見る事ができずに顔を逸らした。恐怖心が自然と手で自分を抱きしめる様な体勢になる。

「……嘘。好きだったら、そんな瞳はしない。」

——そんな、エルの心を映して無い瞳はしない。

そんな意味を込めた言葉だった。しかしエルは、片手で片方の瞳を覆い艶然と笑む。

「この瞳は私が生まれ持った物です。しかし、メイさんが気に入らないのなら、今すぐに別のものと変えましょうか。そうですねえ、オルガと言ったでしょうか、あの少年は。彼の瞳と交換しましょう。あなたは最近彼といつも一緒に居るようですし？」

言葉に驚きエルを見ると、顔に翳された指の隙間から感情の無い黒い瞳が光る。

「彼と一緒に居る時に、私に邪魔されないように結界も張ってま

すよね？そんなに二人になりたいんですね。まあ、何をしているか聞いたりはしませんけど、せめて瞳位は傍に居させてくれますよね？」

微笑みながらも本気でやるぞと、私を見る瞳が物語っている。

——どうしてこんな事になってしまったんだろう。

この言葉を思うのも本日二度目である。

なんだか、話がすり替わっているような気がするけれど実行させてはいけない。それだけは判る。それになんだろう、この浮気を責められているような気持ちになるのは。いや、コイツと付き合っていないから浮気にはならないんだけど。

背中に冷や汗をかきながらこの窮地をどうしようかと考えているとポケットに入ってたままの指輪の存在を思い出した。

指輪を取り出し、微妙に引きつった笑顔も一緒にエルに見せる。

「こ、これみて！私、黒く輝くものが好きなの！うん、とってもね。だから媒介も黒い石なのよ。……エルの瞳も好きよ？」

エルは目から手を下し、口から何とも言えない溜息を一つ吐くと両目を伏せた。

変な考えは諦めたのかしら？

無理やり作った笑顔は口の端が引きつってとても辛い。エルは両目を伏せたまま動かない。

もしかして、嘘が見抜かれた？黒い物が好きというのは嘘。時折見る夢のせいで、黒い物をジッと見ると怖くなるから苦手なのだ。

ああ、沈黙が辛い……。一秒が百秒に感じる。

観察眼（前書き）

誤字がありましたので、直させていただきます。
内容は変わっておりません。

観察眼

『時の牢』から戻った後、すぐに小娘^{メイ}の傍へ飛んだ。魔法を封印されている人間が無理に魔法を使うとどうなるのか少々気になったのだ。

どれだけ時間が経っていたのかは判らないが、メイは夕暮れ時の屋上に居た。

健康状態は問題ないようだ。

何やら小娘^{メイ}は人間のオルガという小僧の前で、地に座りながら額を地面に擦りつけているいわゆる土下座というものをやっていた。どうやら謝罪をしているようだ。

盗み聞きの趣味などない。だから帰ろうかと踵を返した時、小僧^{オルガ}の気になる一言が聞こえてきた。

「あ、もしかして愛の告白？」

最初小娘^{メイ}は困惑気味な顔をしていたが、小僧^{オルガ}が何やら言葉を発すると小娘^{メイ}の顔が真っ赤になった。

———気に食わない。アレにあんな顔をさせて良いのは自分だけ……。

ギリツと奥歯が鳴る。

二人の前に行こうと思うと同時に小娘^{メイ}の声が聞こえた。

「……どうしてもエルを使役したいの。」

前に出かかった足が止まる。小娘^{メイ}の言葉を聞いた瞬間、自分の中に何とも言えない気持ちが生じた……嫌悪と歓喜が入り混じっている。この感情はなんという名前なのだろう。

人間になど使役されたくない。だが、小娘^{メイ}になら使役されてみたいと思う自分が居る。

盗み聞きなどはしていないが、メイはどうしても自分を使役したいらしい。それをオルガに協力してほしいと申し出たようだ。

先ほどまで泣きそうな顔をして土下座していた小娘^{メイ}が、今は笑って小僧と明日は『エル使役攻略対策会議』を開くと言いながら屋上を去っていく。

小娘^{メイ}が見えなくなったところで自分の口から眩きが漏れる。

「また、妙な事を始めるのか。」

小娘^{メイ}は思いついたらすぐに妙な事を始める癖がある。

いつだったか、自分が魔法を使えないと判った時はどこかの国は滝に打たれて修行するとか言い出し、真冬の雪が降る中、本当に滝に打たれていた。あの時は「阿呆な娘だ」と呆れたものだ。

他にも魔法が使える薬という明らかに怪しい薬を貰い、飲んで腹を下していた時もあった。阿呆伝記でも書けそうなほどだ。

「――エル様。そんな顔をするほど、あの娘が気になりますか？」

ああ、コイツも居たんだったか。

側近のエンジュは無然とした面持ちで自分を見ている。

横目で、どんな顔をしていたんだと視線で語る。

「……笑っておいでです。珍しいですね、あなたがそんな表情出来るとは思いませんでしたよ。」

「そうか。」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

※

小娘は小僧と『会議』を開くべく、いつも二人が使っている研究室へと入って行った。二人が入ると、すぐに結界が張られた。

——聞かれないようにか、意外に頭が回る。

こんな結界は簡単に破れるが……まあいい。どんな事をしても今の小娘には自分を使役できない。今の小娘は、自分を怖がっている……いや、怖いと思っているのは、この黒い瞳か。過去に小娘を殺そうとしたのが自分だという事は記憶になくても魂に刻まれている。その証拠に小娘は、無意識にだが、この黒い瞳を見ようとしなない。

もし、恐怖心を破り自力で封印を解き記憶を取り戻し、それでも自分を望んだら……。

そうしたら自分はどうするだろうか。以前なら、また記憶を封じた。だが今はそうしたくない自分が居る。

明くる日、小娘は小僧に攫う様に連れて行かれた。行き先は『総学院長室』。二つの学校をまとめる人間の所だ。

この部屋の持ち主はたしか召喚士だ。五十年ほど前に一度だけ会った事がある。自分を呼び出せる人間はそういない。故に呼び出した人間は記憶に残る。

「オルガが世話になつとるね。」

不意に聞こえてきた昔と違わない声に、声の持ち主の風貌を思い出す。膨大な魔力を餌に自分を呼び出した事と、まっすぐに見てきた琥珀色の瞳が印象に残っている。

——そうか、小僧^{オルガ}は召喚士の血縁者だったのか。
魔力が強く、制御出来ていない理由が分かる。アレの子供……いや、孫辺りか。

要らん事を考えている間に結界を張られたらしい。邪魔されたくないのだろう。昨日と言い、本気で自分^{エル}を使役したいと考えているのが窺い知れる。

何をやっているのか少々気になる。だが、結界を張ってまでする話なんだろうか。

しばらく待つと、一人出てきた。小柄な後ろ姿——メイである。部屋をでて扉に書かれた名前を見て驚いている。自分の学校の偉い人間が判らんなど、本物の阿呆か？

メイが自分に気づく前に、いつものエルの仮面を被る。

——エンジュの様な話し方と表情をする仮面を……。

面倒だがしょうがない。だが、反応が面白いからやめれない。

仮面を付け、メイに近づく。「とおーっても会いたかったですよ。」と言葉を放ちながら。

メイを連れて、精霊と人間の世界の狭間にある『狭間の森』へ飛んだ。学校の裏にある森だ。

ここで、この二日間何をしようとしていたのか聞こうとした。だが、何かを失敗した。人間の女が好む言葉を使ったのだが、どこをどう転んだのか今は好き嫌いを話している。

「好きだったらそんな瞳はしない。」

そう言ったメイに、今すぐこの瞳を小僧オルガの瞳と変えるという言葉
を放ってみた。

一瞬で青ざめ、泣きそうになっている。

すぐに「冗談」と言うつもりだったが、メイの反応に少しイラつ
いて意地悪な冷たい笑みを放つ。泣きそうな表情はさらに深くなっ
た。

——あの小僧オルガの為に泣きそうな顔をするな。お前の思考にあっ
ていいのは俺だけだ。

仮面が剥がれそうになり、何故だかそう言いそうになった。言う
前にメイが自分の魔法媒介を取り出し、言葉を放ったのだ。

「こ、これみて！私、黒く輝くものが好きなの！うん、とっても
ね。だから媒介も黒い石なのよ。……エルの瞳も好きよ？」

取ってつけたような言葉だ。黒い物が好き？……嘘だ。お前は黒
い物に恐怖心を抱く筈だ。だが、最後の「エルの瞳も好きよ」は何
故か心が温かくなった。泣きだしそうながらも、真剣な眼差しがこ
ちらを見ている。

——いつの間にか、監視していたはずが捕らわれ始めているの
だろうか……。

訪れた微かな闇

黒い物が好きという口から紡がれた出まかせに、しばらく沈黙してしていた。

沈黙を破ったのは、エルのくっくっという笑い声。彼からは心なしか黒いオーラが出ている気がする。

今この男と二人で居るのは危険と警鐘を鳴らす人間の本能に従い、この場を離れようと決めた。

ここは総学院長から行ってみるようになされた裏山だ。日もまだ高い。本当はオルガと一緒にきたかったけれど、地図も持つてるし今から行ける所まで一人で行ってみよう。さて、どう言ってコイツから離れようか……。

顔には無理して作った笑顔を張り付け、少しずつ後ずさりながらエルとの距離を取った。

……いや、距離を取ったつもりだったが、私が一步下がればエルが一步進み、全く距離が取れてない。

顔に張り付けた無理やりの笑顔の所為で、頬の筋肉がかなり痛い。この際、ひと睨みして「ついてくるんじゃないやねえ!」とでも言った方がいいのだろうか。——止めておこう。コイツは殴っても蹴っても目の前に現れるのを止めない奴だった。コイツがMな人だったら、

きつい事を言うのは危険だ……。どこにでも現れる事ができるやつだ。ストーカーになりかねない。使役されてくれる精霊は欲しいけれど、ストーカーしてくる精霊はいらない。よし、ここは温厚に温厚に……。

「メイさん、この至近距離で独り言を言うのはお勧めしません。丸聞こえですよ。第一、私はストーカーではありません。ただ、あなたに私の印をつけてあるので、いつでも傍に行けるだけですよ。……ああ、印？　こうやってつけたんですよ——」

黒いオーラをそのままに、妖艶に笑うと、エルが指先でスツと自身の形の良い唇をなぞり、私のそれと合わせる。

「——っ！　んう……。」

口が塞がれて言葉が出ない代わりに、自由な両手でエルの胸元を押すがピクリとも動かない。今度は両手を頭上で一括りにされ、近くの木に押さえつけられる。また足を踏んでやろうと思っても、足はエルの長い片足で抑えられているように動かない……。

……とってもヤバい状況よね！？　コレは！！　——こうなったら……。

唯一動くのは、エルに唇を翻弄されている頭のみ。

こちらにも痛い攻撃は嫌だ。でも、このままの状況はもつと嫌。覚悟を決めて、頭をエルの顔めがけ渾身の力を込めて振った——。

鈍い音がしたと同時にエルの呻きが聞こえ、私の頭の中に星が飛んだ。痛いを通り越して、目の前がチカチカする。そして、エルの拘束が一瞬緩んだ隙に、押さえつけられた木から抜け出すと小走りで彼から離れた。

ちらりとエルを見ると、私の頭突きが口元に当たったのか、口元を手の甲で拭いながら眉を顰^{ひそ}めながらこちらを見ている。

「……じゃじゃ馬だな。」

いつも人をからかって楽しんでるエルとは違う暗い闇を纏う雰
囲気を醸し出しながら、無表情でこちらに近づいてくる。

……いつものエルじゃない。誰？この精霊^{ヒト}は。

今の彼に捕まると闇にのまれそうだ。逃げなきゃと思っていても
足がゆっくりとしか動かない。

……一步エルが足を進める。こちらはゆっくりと後ずさる。お互
いに無言で、何度も後ずさりながらエルを警戒していると、ふいに
足元がすべった――。

「――っ！きゃああああ……！！！！」

足元の平坦な地面が無くなり、急な崖に近い坂を転げ落ちながら
視界に入ってきたのは、無表情で私を見下ろすエルだった……。

しばらく転げ落ち、不意に訪れた浮遊感の直後に派手な水音が聞
こえた。川に落ちたと理解したのは、水中だと気付かず息を吸いこ
んだら水を吸い込み、苦しくなった時だった。

着ている服の重みでうまく動けず、水面に浮く事も叶わない。こ
のままじゃ……。

肺から出た酸素が、口から大小様々な気泡となり溢れ出る。手や
足には力が入らず、地上に向かって手は延ばされたまま、徐々に霞
んでゆく意識。突然訪れた死の恐怖と、先ほどのエルの行動に絶望
し水の中に涙が溶けた……。

霞んでゆく意識が途切れるまで頭の中でよぎったのはエルの事――。

無意識にエルに助けを求め、差し出した手を取ってもらえなかった。

エルなら後ろが崖になっているのも気付いていたのに、何も言ってくれなかった。

落ちていく私を無表情で……。

――どうしてっ……!？

蒼いエル!?

意識が途切れる寸前、地上へと伸ばした手を握られた気がして、閉じた瞼を僅かに開いた。

微かに見える視界に映ったのは、先ほどまで無表情で見下ろしていた精霊に見えた。今は何だか泣きそうな顔をしている……。

「エル。」

声を出す力も無く口だけで彼の名を呼び、重くなった瞼を閉じ、意識が落ちた……。

※ ※ ※ ※

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

母様は歴代召喚士の中で最年少記録を生み出した人で、在学中に同級生だった父様が最年少入学の母様に惹かれ、数年かけて猛アタックをした結果、メイを十七才で産んだらしい。メイを産んだすぐ後に父様と同じ宮廷召喚士になったため、いつも王様のいる王宮に居る。

そんな母様が今日はお休みの日で、メイは嬉しくて、朝からべったりとくっついて甘えながら、そこに居る精霊達の話をしていた。

「母様が、メイちゃんにとっておきの魔法を教えてあげる。」

いつも居ない父様と母様の代わりに私と遊んでくれるのは、叔母さんと、父様と母様の力に惹かれて集まってくる精霊達。叔母さんが忙しい時はいつも精霊達が傍に居てくれる。でも、精霊達は気まぐれで、たまに仲間はずれという意地悪をするのだ。だから、もっと仲良くなれば意地悪をされないと思って相談してみた。

「魔法？精霊と仲良くなる魔法をメイも使えるのっ？！」

四歳であるメイが今使える魔法は、部屋の手明かりを調節する魔法くらいだ。精霊と仲よくなる事ができる魔法があるなんて！

メイは嬉しくて両親から譲り受けた榛色はしばみいろの瞳を見開き、子供らしいぷつくりとした頬を桃色に染めた。

もちろん、と母様は未だ幼さの残る顔で柔和な笑顔を浮かべた。

「誰でも使えるわ。ただ、精霊達に心をこめてお話をするだけなの。言葉には力があるから。」

「お話ならメイしてるよ。でも、意地悪するんだもん！」

ぷうつと頬を膨らまし、眉間にしわを寄せたメイの頭を撫で微笑みながら母様は話を続ける。

「精霊たちは意地悪じゃなくて、メイちゃんができない事が判らないだけだと思うの。精霊たちの中には、メイちゃんと仲良くなりたい子もいるはずよ？だから、心をこめて仲良くなりたいって素直に言ってみたらどうかな。できる？」

母様と話をした次の日に、仕事へ行く母様を送り出し早速精霊たちに実行してみた。やや緊張しながらも、微笑みながら心をこめて一言づつ口から紡いで話した。

「みんな、いつも遊んでくれてありがとう。メイはみんなの事大好き。だから、もっと仲良くしてください。」

いきなりみんなと仲良くなれなかったけれど、メイのできない
事をする遊びはしなくなった。

寒い。体の芯まで凍える寒さだ。無意識に、寒さで歯がガチガチと鳴っている。

意識が浮上してくると、近くに誰かいるのか人の動く気配がした。「目が覚めたかな？ ああ、動かないで。」

聞こえてきたのはテノールの様な男性にしてはやや高い声。

この人が沈んだ私を助けてくれたのだろうか。

不意に額に触れた手の感触で、男性の手だと認識出来た。同時に香ってきた匂いでエルでは無いのも認識出来た。エルが手を握ってくれたのは、自分の妄想だったのだろうか。

心の奥でチクリと針で刺された様な痛みが走った。

まぶた
瞼を開けるのもおつくうな程、体が気だるいが薄く目を開けた。

自分の瞳に映ったのは、どこかの洞窟だろうか。少し薄暗く湿り気のある場所で焚き火にあてられ、寝ていた。そして、焚き火の灯

りに照らされて私を覗き込む蒼い瞳。目の前に居るのはエルじゃない。そうは判^{わか}っていてもその顔の造形は……。

「――エル……。」

エルの顔が目の前にあった。彼の名を呟^{つぶや}くと、不意に涙が溢れた。「……悪いね。似ているけど、俺はアイツじゃないよ。もう少し寝ると良い、熱が出てきたようだし。」

エルに似ている彼は、エルではないような優しげな笑みを浮かべながら、大きめの湿った布を私の額から目にかけて置いてくれた。その布に次から次へと溢れ出る雫を吸い取ってくれた。

頭が痛い。心は、もっと痛い……。

どれだけ泣いていたんだろう。ウトウトし始めた頭の中に、近くに大きなものが落ちる音と人の悲鳴が響いた。

「――痛^いってえええっ!! なんだよ、クソ精霊!! ……どこだよ、此^こ処^こにおおっ!!」

近くで響き渡った見知った声にメイが飛び起きた。

「オルガッ!」

「ああっ! だから動くなって!!」

オルガが声をした方を見ると、メイが糸纏^{まと}わぬ姿に布を掛けた状態で、上半身むき出しで座っていた。隣にはオルガをここに送り込んだクソ精霊^{エル}の姿があった。

「――クソ精霊っ! メイにナニしたんだよ! オマケに僕をこんな所に連れてきてっ……て、あれ?」

エル
オルガが男に詰め寄ろうとして、エルではない事に気付いた。ク

ソ精霊は黒檀の様な黒い髪だったはずだ。その男は腰まである長い直毛で、青い髪を後ろで一本に束ねていた。

「何もしてないよ。水にぬれてたから脱がしただけだ。——君も俺をアイツに間違えたねえ。」

やれやれといった風で「だから動くなと言ったのに」とぶつぶつ言いながら、男がどこからか出てきた布をメイの肩にかけた。

メイ、考える

オルガの登場でウトウトし始めた意識が覚めてしまったので、なぜここに居るのか聞いてみた。

オルガ曰く、話が終った頃を見計らって私を迎えに総学院長の部屋に行ったら、もう私が帰った後だった。せっかくここまで来たんだし、その部屋で総学院長と話をしていたら、いきなりエルが現れオルガを私の居るこの場所に飛ばしたらしい。

「———本当に何だよ!!あのクソ精霊はっ!!気付いたらずぶ濡れのアイツが目の前に居て、何も言わずに此処にいきなり飛ばしたんだよ!?!しかもメイは裸だし、その隣にはアイツそっくりな男が居るし!!……ああゝゝっ!!もうわけわかんないよっ。」

オルガは床にしゃがみ込み、両手で少し癖のある赤毛をワシワシと搔いている。

自分が服を着ていないのはスースーするから判っていた。……たぶん隣に居る精霊が気を利かせて脱がしてくれたんだろう。でも、自分の羞恥心の問題であえて考えないようにしていた。このことは忘れよう。うん。

それにしてもエルがずぶ濡れ……?じゃあ、あの時手を握ってくれたのは……。

「……妄想じゃなかったんだ。」

誰にも聞き取れない程小さな声でポツリとつぶやいた。

メイは握られた方の手を見て、微かすかに思い出せる手の感触と、あの泣きそうな表情を思い出し頬を緩める。

私が溺れているのを、すぐく辛そうにしていた。しかし、水の中に落ちる前に見たいいつもとどこか違う黒いオーラを纏うったエルを想い、瞳が揺らぐ……。

いつも甘い言葉を囁ささいているエル。そして、何の感情も見えない表情のエル。どちらが本当の彼なのだろう。いつものエルは私を助けようとしてくれている。でも、後者のエルは私を疎うとんでいる感じがする。

———思えば、私はエルの事を知らなすぎる。彼を使役したいと思っ
ていても、魔法が使えないとか、精霊が逃げていく事ばかり気に
して、エルという精霊を自分で調べようとしていなかった。昔か
ら黒い物を見ると怖くなるという理由をつけて、エルの黒い瞳から
目を逸らし満足に彼を見ようとしてなかった。

『後悔』という感情と共に涙が沸き上がってくる。

次から次へと溢れ出る涙を優しく拭ぬぐってくれたのは、隣に居たエルそっくりな人。

「さっきから泣いてばかりだね、君は。……君がこんな状況にあるのは、アイツの所為せいなんだね。全く、何やってるんだか。」

優しく微笑む彼は、どう見ても精霊だろう。しかも、エルにとても近い上級精霊。

月が映える夜の様な蒼い瞳をしている。そして瞳と同じ色の髪。彼はエルと違い怖くない。柔らかな雰囲気だからだろうか。

彼に見惚れていると、正面からオルガの咳ばらいが聞こえてきた。
「げふんっ！んんっ！……僕を忘れないでくれる？　で？　蒼い精霊さん、あなたは何者なわけ？　あのクソ精霊にそっくりなんだけど兄弟？？」

蒼い精霊はオルガを見ながら声を出して笑い、愉快な事を言うねと目を細めた。

「ああ、もちろん、忘れてないよ。精霊に兄弟は居ない。俺たちは同じ女神の想いから発生したんだ。だから顔が一緒なだけ。……それにしても、君は大物だね。精霊に何者か？　って聞くだなんて。答えるわけじゃないじゃない、捕まるの嫌だし。」

ははは、と笑顔を浮かべているけれど笑っていない。こんな顔はエルと共通するものを感じる。従えたかったら、実力でやれと……。背筋に冷や汗が一筋流れる感じがした。

精霊は自然発生する場合と、神達の想いや願いから発生する場合がある。どうやらエルたちは後者の様だ。学校で読んだ本に書いてあったが、発生させた神の力に比例した精霊が生まれるらしい。

少し前にエルから言われた言葉が頭をよぎった。

『今のメイさんじゃ私を使役する力は一生ないです。』

言いきってもいい、と彼は私に言っていたはず。じゃあ、エルはかなり力の強い神から生まれた事になる。そんなエルを私は過去に呼び出して、名前を読んだのか……。そもそも、いつ呼び出したのか記憶にない。呼び出せるという事は、過去の私はエルを使役する

力を持っていたという事になる。なんで今その力がないんだろう。

過去に想いを馳せると、小さなころから見ていた夢の黒い双眸そうぼうとエルの黒曜石の様な瞳が重なる。あの瞳を見るといつも胸の奥に何か引っかかりを感じていたのだ。もしかしたら、その引っ掛かりが総学院長の言っていた『呪いに近い物』かもしれない。

オルガから目を逸らした蒼い精霊は、再び私に視線を戻すと問いかけた。

「泣き虫のお嬢さん、精霊使いが精霊を使役するってどういうことか分かるかな？」

え？と隣の精霊を見る。

精霊を使役する事……。精霊使いになるには精霊を使役しなくてはいけないから？

いや、何だか違う気がする。

「……。」

答えれない。精霊使いは精霊を使役しているのが当たり前前で、考えた事が無かった。

「じゃあ、聞き方を変えよう。人間と精霊は対等？精霊は精霊使いの下僕ではないよ。きちんと感情が備わっているんだ。愉快に思えば、不愉快に思う時もある。……楽しいと思う時があれば、悲しいと思う時もあるんだ。」

やや冷たい視線が私に突き刺さる。なんだか責められている様な感覚になり、隣を見る事ができなく俯いた。

蒼い精霊VSオルガ?!

『人間と精霊は対等? 精霊は精霊使いの下僕ではないよ。』

そんな質問をした蒼い精霊は、俯いた私から視線を外すことなくこちらを見続けているのが気配から伝わってくる。何かを試されているのだろうか……? オルガもそんな気配を感じたのか、息を殺してこちらの様子をうかがっている。

人間と精霊が対等かだなんて考えた事が無い。——『下僕』だなんて思った事すら無い。

数年前まで、私の周りには当たり前のように精霊達が居てくれた。朝「おはよう」と言ってから夜「おやすみ」を言うまで、まるで家族の様に。

でも、この学校に入ってしまったら精霊達が私を避けられるようになって……。その時は悲しかったのを覚えている。前日まで仲良くしていたと思ってたのに、いきなり避けられるようになったのだ。それ以降も、学校の課題で精霊を一人でも使役しなければいけなくなり、呼べば来てくれるけれど私の顔を見てすぐに逃げちゃうの繰り返しだ。最初の内はすごく怒った。けれど次第に悲しくなり、精霊達に嫌われたみんなと思い、物陰に隠れて一人泣いていたものだ。

蒼い精霊の質問の答えになっているかはわからない。でも、私に言えるのは一つだけ。私は心を決めて精霊を見た。そして、幼いころに母様に教えてもらった『精霊と仲良くなる魔法』を想い、口を開いた。

「精霊は、私の上でも下でも無い。下僕だなんてとんでもない！
精霊達は私の家族です。物心付く前から一緒に居て、朝から晩まで傍に居てくれて……。ここ数年は避けられて悲しいけれど、それでも家族です！どんなに避けられても、嫌われても私は精霊が大好きです！とっても！！」

最初の内は静かに話していたけれど、次第に力が入って、隣に居た精霊に詰め寄る勢いになってしまった。勢いに驚いたのか、精霊は家族だ発言に驚いたのか、蒼い精霊はその色の瞳を大きく見開いている。
瞬きする程の短い時間固まっていた精霊は、次第に目を柔らかく細めた。

「……さすがアイリスの娘だね。言葉に自分の想いをのせる方法を知ってるなんてね。それにしても『家族』か……。君はお母さんと似た事を言うね、彼女は精霊を『友達』と言っていたよ。———メイ、君の事を気に入った。だからご褒美をあげよう。」

———アイリス……。母様と知り合いなの？と聞こうとするが、口を開く前に精霊の指がトンツと心臓のあたりを突く。すると、突かれた所からジワリと痺れだした。その痺れが早々と体中に周り、最後に頭に来たと同時に意識が途切れた……。

「——ちよつ、何したんだよ！」

目の前に居る蒼い精霊が「ご褒美をあげよう」と言いメイに触れた途端、彼女が崩れ落ちた。オルガが駆け寄ろうと身を動かすと精霊に手で制され、心配すると言われた。

「言っただろう？『ご褒美』だよ。……ところで君は、アイツの事をどこまで知っているんだい？」

メイを見る柔らかな瞳とは対照的な視線でオルガを見る。虚言は許さないという雰囲気だ。オルガは視線を彷徨さまよわせた挙句、溜息を一つつき覚悟を決めた。

「……たぶん、調べれる事の全部。三年位前からかな。メイから変な上級精霊の話を聞いて、こっそりと自分の精霊を使って調べてたんだ。精霊の話を聞いて、文献でも調べたけどその精霊がとんでもない精霊だったからイマイチしっくりこなくて、さっき爺ちゃんじいと話して、はまらないパズルのピースが埋まった感じがしたんだ。僕の予想が当たってればあの精霊の名はエア「死にたくなければ、その先は言わない方がいい。」」

名前を全部言う前に重ねられた言葉に「そうだった」と頷く。うなず此処に来る前に、爺ちゃんに、死にたくなければあの精霊の名前は絶対に言うなとしつこく言われていた。

「君は相当の食わせ者かもしれないね。アイツの事を見当ついてても、今まで彼女に何も言ってあげなかったんだ？」

今にも視線で射殺せそうな鋭い蒼の双眸でそうばうオルガを見る。メイを見る柔らかな視線とは雲泥の差だ。オルガはその視線を苦い表情

で受け止めた。

たしかに、今までに何度も彼女にあの精霊^{エル}の事を話そうと思えばできた。調べていく内になぜメイから精霊達が逃げて行くのかもだいたいわかってきていた。それを言えなかった——いや、言わなかったのは自分のクソ精霊^{エル}に対する嫉妬心からだ。少し前、メイがクソ精霊^{エル}の事を話す時の表情が自分と話す時と違う少女の顔をしているのに気付き少しショックを受けた。

メイを好きだとは思っていた。でもそれは、好意であり恋慕ではないと思っていた。

この想いに気付いたのはつい最近の事だ。彼女がクソ精霊^{エル}じゃなきゃダメとあの時に屋上で言わなければ、きっと気付かなかっただろう。……いや、予感はある。僕の方がいつも彼女と一緒に居るのに三年程前に知り会った精霊の話をする時、楽しそうに嬉しそうなメイの表情を見ると胸がチクリと傷んでいた。

恋敵となるクソ精霊^{エル}そっくりな顔をもつ目の前に居る蒼い精霊は、正直見ていて気持ちのいい者ではない。だが、蒼い精霊を見やり重い口を開く。前半にオルガの想いと思惑を込めて。

「……言わない方がいい事もあるでしょう？メイがあなたの正体に気付いたらきっとアイツの事はすぐに気付くだろうし。彼女がこちらに聞いてこなければ、僕からは何も言わない。」

メイにアイツの正体を話したら、きっと彼女の悩んでいる精霊や魔法に関する問題は解決するだろう。でも、今言っではいけない気がする。

ちらりと意識が無く再び眠ってしまったメイを見て考える。

クソ精霊^{エル}が僕の前に現れた時、アイツはずぶ濡れだった。メイもきつとそうだったんだろう。じゃなきゃ、こんな格好はしていない筈だ。それなのに、ストーカー気味のアイツが傍にいないという事はアイツが原因だろう。

それに、このメイを想う気持ちは彼女に言わない方がいい。きつと重荷になるだろう。彼女は僕の事を少し苦手に思っているようにだし、男として意識していない。……何を考えているのか判らないクソ精霊^{エル}に負けるつもりはないけれど。

羞恥心でいっぱい

オルガと蒼い精霊との間に流れる空気は未だ緊張感が漂っていたが、その空気を破ったのは蒼い精霊の笑い声だった。

「はははっ！ 本当に君は食わせ者だね。その言い方だと、俺の正体を知ってるんだよね？——それに、頭も悪くないようだ。：でもさあ、精霊について勉強不足だね。高位精霊に正体知ってますなんて言うのと、その精霊の名前を言わなくても精霊が怒って普通は存在を消されるよ？俺なら君程度は瞬殺だね。まあ、メイが居るから今はやらないけど？命拾いしたね。」

蒼い精霊はニヤリと口元を歪ませ、綺麗に整った人差し指を横に引き首を切る動作をした。そして、笑顔で恐ろしい事をさらりと言う蒼い精霊に気圧されて、冷や汗がオルガのこめかみを一筋流れた。恐怖感からか無意識に自身の纏まとっているローブに縫い付けてある魔法媒介の宝石を握りしめている。

「そんなに警戒しないでよ。今は殺さないって言ったよ？君が居なくなると、彼女が悲しむだろうしね。」

オルガから視線を外し、横たわるメイを慈愛に満ちた表情で見つめる蒼い精霊。クソ精霊エルと蒼い精霊の、メイとその他に対する態度の差は何だろう？オルガは疑問に思った。だが、さっき言われたように精霊に関しては専門外なせいか、勉強不足なため何が精霊の逆鱗に触れるのか判らなく、聞くに聞けなかった。宝石を握る手を外し、勢いをつけて立ちあがると恐怖心をごまかす様に半ば叫ぶように口を開いた。

「帰る！メイを連れて、今すぐに。彼女の着てた服は？」

蒼い精霊は少しすまなそうな顔をして、警戒心をむき出しに近づいてきたオルガを見上げた。薄暗い場所だが、メイの暖をとるために焚いてある火に照らされたオルガの真っ青な顔を見て、少し遊びすぎたと心の中で苦笑した。

「ごめん。君で遊びすぎたようだ。君の心の中には彼女でいっぱいだったからさあ。はははっ！……お詫びに俺の能力の一つを教えてあげよう。——俺さ、心の中が見えるんだ。」

蒼い精霊の言葉を聞いた途端、オルガの頭の中が真っ白になった。そして一拍の間を置いて、持ち前の瞬発力で飛ぶように蒼い精霊から離れ、思考回路が羞恥心で埋まった。

「……っんな？えええっ？」

先ほどまで真っ青だった顔は今は彼の髪の色のように燃えるような赤色になっている。

「いやあ……。離れても心は見えるんだけどね？」

蒼い精霊の呟いた言葉など今のオルガの耳に入らない程羞恥心でいっぱいだった。呻きながら両手で頭を抱え込み、その場にしゃがみこんだ。

——知られた！！つい最近気付いたメイへの想いが知られたっ！……さっきまで何考えてたっけ？ああ、思い出せないっ！！恥ずかしすぎるよコレは……！！　　っていうか、今も……？

ちらりと蒼い精霊をのぞき見ると、満面の笑みで頷いている。「もちろんさ」とでも聞こえてきそうだ。心の奥底から、この事を考

えるのはよそうと決めた。いろいろ考えれば考える程恥ずかしい事になりそうだ。

「……いつか、心が隠せる道具を開発してやる。」

ぼそりとそう呟いた。「まあ、頑張つて。」と聞こえてきたのは気にしないでおこう。

＊ ＊ ＊

帰ると言っても、メイの服を出してくれないからには帰る事は出来ない。素っ裸のメイを連れて帰ったら、何だか僕が犯罪者扱いになりそうだ。

「そもそも、何で服を着てないのわけ？」

正直言つて、かなり気になっていた。自分のをこの場所に飛ばしたクソ精霊^{エル}は、水が服から滴り落ちてくる程ぬれていた。メイも同じような感じだったんだろうか。二人で服を着たまま泳いだとか？それとも、水の中に落ちた……？だったら、なんでアイツがメイの傍にいないんだ？——いや、そもそもアイツが僕をこの場所に連れてくるんじゃないかと、メイを寮の部屋に送って行けばよかったんじゃないのか？

「……ははっ。この時期に泳がないでしょ、普通は。君が思つてる通り彼女は川に落ちたんだ。アイツはすぐ傍に居て、落ちた彼女をしばらく見た後慌てて助けに行つてたよ。助ける気があるなら早

く助けてあげればよかったのに何をやってるんだか、アイツは。もちろん、服を脱がしたのは俺に仕えてる精霊達。あのままだと低体温になりそうだったし？——ああ、彼女を置いて行ったのは連れていく程の力が無かったんだと思うよ？アイツは水の中に入ると能力が極端に減るからね。もしかすると君が居た場所で倒れてるかもね。」

口に出して聞いてない事まで喋ってくれたこの精霊にどう対応したらいいんだろう、そう心底思った。そして、この場所に飛ばされる前に居た場所の事を考えた。

『総学院長室』あそこには自分の祖父と聖獣が居たはずだ。そんな場所で力尽きているクソ精霊なんて想像したくないけど。……僕が此処から帰ってもあの部屋あるかな。

最強老翁（前書き）

ご覧いただきありがとうございます！

最強老爺

息遣いが聞こえてきそうな程静かな部屋に、一人の老爺とその老爺に仕えている金の角を頭に持つ馬型の白い聖獣と、ずぶ濡れの床に伏した精霊が居る。

精霊は此処に来て直ぐに、老爺——総学院長の向かいに座っているオルガをどこかに飛ばした。そして、オルガが消えるのを見届けてから床へと崩れた精霊のしなやかな肢体。立ちあがる気力も無いのか伏したまま老爺と聖獣に向けた黒曜石の様な黒く輝く双眸を送っている——殺気を込めて。その殺気に即座に反応したのは白い聖獣である。聖獣は老爺の前に出て、今にもその角で一突きしそうな体勢をとっている。

老爺はその殺気に気付かないのか気付いてないふりをしているのか、飄々とした態度で場の殺伐とした雰囲気^{ひょうひょうき}を壊す。

「お久しゅうとご挨拶した方がよろしいか？ 貴方は変わっておらんのじゃな。……それにしても貴方が人の前で伏している姿を見るのは初めてですな。今なら僕でも使役できそうじゃ。」

その言葉に反応した精霊の殺気がさらに濃くなる。

「貴方と初めて見たのは半世紀以上前だったか……。僕の知り限り、貴方を使役できる者は誰一人おらんかったの。歴代最高峰の召喚士と言われたアイリスでさえ貴方を使役できなんだ。貴方を使役することは全ての召喚士と精霊使いの悲願じゃ。——僕も悲願でもあった。一位の精霊王『エアリエル』殿。」

老爺が名前を言うと同時に殺気が膨れ上がり、部屋中に風が吹きあれ風の矢が飛び交い、部屋に居る者の服や顔が切れていく。老爺の前に聖獣が出て風の攻撃から守るが、老爺の皮膚には幾筋も赤い線ができる。エアリエル——エルの整った顔や手にも赤い筋が入るが、直ぐに消えていく。

「――クッ……。人間に使役される位ならば、このまま果てて消滅した方がましだ。」

自分の認めていない者に、力でねじ伏せられる位なら自身の力で果てる。自分でも覚えていない程昔に決めた事だ。

一人の少女が頭の片隅に浮かんだが、目の前に居る老爺に使役されるという嫌悪感がそれを払い去った。そして、立ちあがる気力が無いほど消耗した自身に残る魔力を集める。――自身を滅ぼす為の魔力を。

攻撃態勢に入った聖獣を片手で制しながら、老爺はエルの忌々しげに吐き捨てられた言葉に、眉をひそめる。

「……相変わらず、プライドが高いのう。」

――自身の属性により、水が禁忌の精霊王。それなのに、こんなにずぶ濡れで瀕死の状態を晒して……。きつと水の中に入ったのじゃろう。おそらく、その原因は一人の少女。オルガをどこかに飛ばしたから、間違いないはずじゃ。水に入るという事は、その気高いプライドを自身が一人の少女の為に一時捨てたのを気付いておらんのか……。

老爺は一息吐きだすと、エルの溜めている魔力が発動する前に、持っている杖で急ぎながらも正確に召喚陣の中に描き一人の精霊を呼び出した。

虹色の光の中に一つの影が浮かび上がる。

影の主が歩を進め、老爺の前で床に伏しているエルを認め目を見開く。

「いきなりの呼び出しに応じてもらい、まずは礼を言おう。――次期精霊王の器よ。^{うっわ}主を連れて帰ってくれんかの？^{あるじ}その対価は儂の魔力を、この消耗しきった瀕死の精霊王に分け与える事でどうじゃ？」

呼び出された精霊は、黒に近い深緑の髪をした精霊だった。その精霊は翡翠色の瞳を老爺に向けると、静かに首を縦に振り一つ頷いた。

「——それでよろしいです。ああ、あまり魔力はあげなくて結構ですよ。復活されるとまた私が探し回らなきゃいけないですから。はあ、小娘の傍を見張ってれば現れるのは判ってるんですが……。とっても面倒なんですよ。」

盛大に溜息をつきエルの傍まで行くと、果てる気満々で自害の魔法を編んでいるエルの腹を蹴り上げた。

「——グッ!!……エン、ジュ……!!」

自身の主を蹴り上げた精霊——エンジュは、主の自害の魔法が中断された事を確認し、やっと自分を見たエルに満足そうに頬を緩め、エルに付いている水分を風で飛ばした。

「ああ、やっと私が此処に居る事に気付いてもらえました?——自身の禁忌を冒してまで水に飛び込むとは思いませんでしたよ。あのまま放っておいても小娘はヒュドラ様や他の方々が助けたでしょうに。それに、瀕死の状態を見られて恥ずかしいからって自害を企む、だなんて何やってるんですか、——馬鹿王。」

エルは蹴られた腹が痛いのか、どこかつつかれたくない所を言われたのか、苦い物を嚙んでいるような表情である。

一位の精霊王といえば、精霊界に居る少数の王の中で一番の力を持つ者をさす。このエアリエルは自身の名前が魔法になるほど力が強い。あまりに力が強大すぎ、気高いプライドで今まで自身が跪いた事が無く、過去に彼を使役したのは二百年程前のこの学院を創設した王のみと言われている。

そんな王に対して『馬鹿王』とは……。今まではそんな事を言う者は見た事が無い。まして腹を蹴り上げるなど……。一位の精霊王がやり込められた姿を見て、老爺は堪らず噴き出した。

「ほっほっほっ！使役する気が失せたわい。貴方のその姿は忘れる事にするかのう。どうやらメイ殿を助けてくれたようじゃの。彼女は儂の教え子達の忘れ形見じゃ、礼を言う。――そして一つ助言じゃ。一人の少女に対して、過去に起こった出来事を忘れ、その気高いプライドを少しは捨ててはどうじゃろうか。貴方が禁忌を冒して瀕死の状態になる程、お譲ちゃんが大切なのじゃろう？」

「……………」

エルから答えは無いが、身に纏^{まと}っていた殺気が本人の意思とは関係なく、少し緩むと老爺はそれを答えと受け取った。

「――近いうちに、十年と少し前の数人の精霊王達の様に、また精霊王が変わるかもしれんの。」

老爺はニヤリ、と揶揄^{やゆ}するように、居心地の悪そうな何とも言えない表情をしているエルを見ながら笑うと自身の持った杖に己の魔力を込めエルに分け与えた。

最強老爺（後書き）

この作品に出てくる精霊王の名前、精霊の苦手属性等は作者の創作です。

「精霊王の名前が違ふよ! ……えっ?! 風って水に入ると力が無くなるの?」との突っ込みは読者様の心の中でのみ、お願いします
^ | ^ ;

解かれた一つの呪い・前（前書き）

いつもご覧いただき、ありがとうございます。

若干長くなってしまったので、今回は区切らせてもらいました。次話は出来るだけ早く投稿したいと思っております！（＾＾）！

解かれた一つの呪い・前

パチリと音が聞こえそうなほど、いきなり目が覚めた。私の瞳は見知った自分の部屋を映している。

誰にも言えなかったけれど、ずっと卒業の事を考えて、逃げる精霊に話を聞いてもらう方法を探して寝不足気味だった。頭も寝不足だった所為かボウとしていた。しかし、何という事だろう。目が覚めてみれば、気分爽快！疲れて重かったはずの体も羽が生えたかのように軽い！誰かが魔法でHPとMPを回復させてくれたの？と言いたい位気分がいい。

気分爽快な私はベットから起き、顔を洗いに行こうと起きた――はずだった。

そう、自分の意識では起きたはずだったのに何故かベッドでまだ眠っている私が居る。

「……何で寝てる私が見えるの？」

何故かベッドに寝ている自分を見降ろしていた。不意に口から零れた呟きに答える者はなく、疑問だけが私の頭の中を巡る。

体が軽いのは、浮いているからっ？！

自分の寝顔を見れるのは、浮いているからっ？！

――私、いつの間に死んだのっ？！もしかして、死んだのも判らない位の事が起こったとか？！

「待て待て、よく思い出してみよう。えーと、さっきは気分爽快で目覚めたはず。そして、今の時刻は……。」

顔を窓の外へ向けると、少し白んだ夜空が見える。靄^{もや}が掛かり、霞^{かす}みかけた月が幻想的な雰囲気を醸^{かも}しだしている。やや明るい夜空は、朝日が昇る前なのかもしれない。

この夜空の色は、蒼い精霊の色を思い出させる。

いきなりエルの雰囲気が変わって驚き川に落ちて、意識を失っていた私を助けてくれた蒼い精霊。彼と話をした。私は満足に答える事ができなかったが、彼は「ご褒美をあげよう」と言っ^て私の胸を一突きし、突かれた所から痺れが広がり、意識が落ちた。

「もしかして……、今のこの状況って蒼い精霊の所為[！]? 『ご褒美』って幽霊にしてくれる事?? うっそおおおー! ! ! ご褒美じゃないしっ! !」

ふよふよ浮きながら、体勢の立て直し方が判らない為、うつ伏せの状態^で両手を頭にあてながら自分の精霊との出会い運の無さにシヨックを受ける。

今まで出会った精霊って、まともなのが居なかった気がする……。この学校に入るまでは意地悪ばかりする精霊達。そして、いつも何故だか好きでもないのに求婚してくる上級精霊エル。会ったばかりの私をこんな幽霊状態^にしてくれた蒼い精霊。くそう、次に会ったらメイ必殺右ストレートをお見舞いしてくれる!!

「『ご褒美』はちゃんとあげたよ。——必殺右ストレートかあ、それは遠慮しておくよ。……痛そうだし? あ、でも今の君は俺に触れないか。」

動き方が判らないから、未だうつ伏せの状態^で顔だけ声のした方へ向ける。そこには、必殺技をお見舞いしようとした蒼い精霊がベツドに横たわる私の本体に寄り添うように座り、笑みを浮かべて立っていた。

蒼い精霊はベッドのサイドテーブルに置いてあった水差しを手にとり「あ、ここから来たんだ。」と言った。

はあ……？ 飲み水を入れておく水差しから来たんですか。そうですか。そんなでかい体が入る水差しでは無いですが……。え？ 水があればどんな場所でも体を変化させれる？——って、どんな軟体動物ですか！

起きたら幽霊になってました、な訳のわからない状況で少しやさぐれている私に優しい笑みを見せながら私に近づく。

「言っておくけど、まだ死んでないから。今の君は、俺があげたご褒美の副作用的な物で、ちよっと魂が体から離れたただけだよ。」

幽体離脱みたいなもの？ ちよっとって事は戻れるの？？

「うん。」

「うん？」

前者の「うん」は蒼い精霊の肯定の言葉。後者の「うん？」は私の疑問の言葉である。私って今、口から喋ったっけ？ の意味の「うん？」である。——その答えは否。私は喋って無い。

……………。

……………。

優しく微笑む目の前まで来た精霊の笑みが、なんだか怪しい笑みに思えてきた。

喋って無くて、答えが返ってくるなんて……。一つの嫌な仮定が成りたち、聞きたくは無いけれど心の中でそっと聞いてみた。

『あのお……。もしかして考えてる事が判っちゃてたり？』

うつ伏せ状態でフヨフヨしつつ背中冷や汗をかき、何も答えないでと思いながら引きつった笑みを精霊に向けた。心のなかでの問

いに答えないでとも思った。

ニコニコしていた蒼い精霊は、若干困った表情をした後口を開いた。

「俺、どうしたらいい？聞いているのに、答えないでなんて。」

……いや、もう予想できたけどね。困った表情をした時に。

「……うん。もう、いいです……。それでどうして此处へ？」

もっと早く心が読めると言ってくれと、言葉の終わりにやや恨みがましい視線を送ってしまったのはいうまでもない。

精霊はいろんな種類が居る。人間では考えられない事ができる精霊もたくさんいる。人間の感情を食べる精霊とか、人格を悪い方に变えてしまう精霊だっている。それに比べたら、私にとっては心を読まれる位許せる範囲だ。……ん？心を読める蒼い精霊って昔どこかで聞いた気が……。

「へえ？心が広いね、君は。オルガ君だっけ？あの子は慌てふためいてたけどね。——ああ、話が逸れたね。君が一週間経っても目が覚めないようだったから、さすがに心配して見に来たんだよ。でも、大丈夫そうだね。アイツがかけた、小さき精霊達を弾く呪いまじなも解けたし。」

一週間も寝ていたのか。……本体は今も現在進行形で寝てるけど。それにしても、『呪い』とはこの間総学院長が言っていた事だろうか。……あれ？アイツ？？目の前に佇むたたず蒼い精霊がアイツ呼ばわりするのは私の知る限りでは一人しかない。——エル、アイツが自分より弱い精霊を弾く呪いを掛けていたのか。そういえば、精霊が逃げるようになったのはエルと知り合ってからだった気がする……。

今までの苦労は何だったのか、と怒りが沸々と込み上げてきた。
そして目を閉じ、若干恨みも込めて私に呪いを施した相手の名前を
呼ぶ。

「……エル。」

次に会ったらメイ必殺右ストレートに蹴りもオマケでお見舞いし
てやる。

解かれた一つの呪い・後篇（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！（^^）！

解かれた一つの呪い・後篇

怒りを鎮める為に、眉間に手を当ててしばらく目を閉じていた。しばらくすると落ち着いてきたので、深い息を一つ吐く。息を吐ききった所で、聞きなれた声がやや離れた所から聞こえてきた。

「……何故そんな場所で寝ている。おまえは、誰だ？」

声が聞こえたと同時に見えない力で首を掴まれ、息が詰まった状態で立たされた。幽霊状態だというのに首は痛く、絞められているのか息ができない。手を首に回しても何も触れるものは無く、自分の手は空を切る。

見た事の無い薄暗く広い広間。広間に灯る等間隔の灯りでやっと見える程度の明るさ。立たされた状態でやっと此処は自分の部屋では無く、どこか別の場所だと知った……。

「——くっ！……あ……。」

目に見えないものが掴んでいる場所を加減しているのか、苦しくても気を失う事は無い。苦しさから生理的に溢れる涙。

揺らぐ瞳でかろうじて視線を彷徨わせた私の視界に入ったのは、遠目からでも判る程整った容姿……。

磨かれた黒曜石の様な二つの黒い双眸を持つ、私の知っている精霊。

——首を絞められた私。

——やや長い前髪から覗く、射殺さんばかりの黒い双眸^{そうまう}。

以前に同じ事が起きた気がする……。そう思った瞬間、胸が痛いほどに脈打ち脳裏にいつも見る夢が横切った。

あれは何時^{いつ}の事だっただろう……。

——ああ、そうだ。少しだけれど思いだした……。

なんで忘れていたんだろう。あれは夢じゃない。両親の亡くなった日の実際に遭^あった事だった。

あの時と同じ虹色に光る魔法陣は此処には無いが、同じ人は少し離れた所に気だるげに座っている。私だと気がついていないようだが……。

私は気付いてしまった。今自分の前に居るのはあの時の夢に出てくる男と同じ精霊——エル、その人だと。

昔はすごく怖いと思った精霊。でも今は何故かエルだと思うと、怖くはない……。

この黒い双眸も、水の中で手を握ってくれた時のあの泣きそうな表情を思うと不思議と怖く思えない。

今、私の心の中に何か温かい物が生じた気がした。

「誰だ？」と聞いても返事をしない私に業を煮やし、私の肢体を見えない力でエルの前へ引きずるように連れて行く。エルが座る豪華な金の椅子——玉座を思わせる椅子に渡る階段下まで来たところで動きが止まり、正面を向くように首の向きを変えられた。

私の瞳が捕えたのは、信じられないとばかりに愕然^{がくぜん}と目を見開いて立ち上がるエル……。

「——メイ………さん。」

眩きと共に首の力が解け、床に崩れ落ちる。体が欲していた酸素を一気に吸い込んだ所為か、気道が処理しきれずに苦しくせき込み胸が痛い。

「……何故……？」

私の聞きたい事と同じ事が、エルの整った口から放たれた。生理的に流していた涙は、次第に自分でもよく判らない感情に支配され、とめどなく流れ続ける。

生理的な痛みと精神的に痛む胸を押さえ、膝を立てながら片手を床に付き、戸惑った表情のエルから視線を外すことなく、未だ止まらない涙を流しながら一氣に口を開く。

「——なんで？それはこっちの台詞^{せりふ}じゃない！！なによっ！協力してくれるって言ったのに、アンタが精霊を弾く呪いをかけてたなんてっ。それを知ってアンタを殴ってやろうと思ったら、いきなり首を絞められて挙句に知らない場所にいるし……！アンタ——

：エルは私が落ちて行く姿をただ見てるだけだったし、かと思えば助けてくれるしっ……！いきなり知らない人みたいな雰囲気をするしっ……！——ああっ……もう訳が判らない！！エル、アンタは私をどうしたいのよっ！」

言いたい事がありすぎて、何を言ったらいいのか判らなくなり、混乱している頭の中を口から放ちそして、流れる涙をそのままに、エルを真っ直ぐに見据える。

エルは靴音を立てながら階段を一步ずつ降り、メイの前に立ちながら少し屈み込みその顔を覗いた。^{かが}^{のぞ}

「言いたい事は判るんですが……、何を聞きたいのか読みとりづらいですね。」

端正に整った表情をやや歪めて微笑むと、綺麗に手入れされた指で溢れ出る私の涙を掬おうとした。けれど、エルの指先は私の目元を触ることなく、すり抜けた……。

眉をピクリとほんのわずか顰め、^{ひそ}メイに触れる事が叶わなかった指を見た後、口が微かに動いた。

「——魂だけ飛ばしたのか……？」

無意識に呟いたのだろう。かろうじて聞き取れる声が耳に入った。エルは自分の手をみて呟いた後、再びメイの顔を覗き込むと手を顎に当て、こちらを見ながら何やら考える仕草をした。

「……成程、ヒュドラか……。アイツの魔力の気配がする。……

ああ、そうかそれで——」

何かに納得した様子で、顎に当てた手のすぐ上にある唇が弧を描いて妖艶な笑みを作る。そして私と視線を合わせた。

「——私の瞳を見ても怯えないんですね……。ねえ、メイさん？ 私との出会いを思い出しましたか？」

その答えに何と返したらいいのだろう。

思い出した、といえばそうなんだろう。でも五つになる前の事だ。全部を事細かく思いだせる訳ではない。それに、過去に私が出会ったエルと現在のエルは何だか違う。どちらかが、彼自身が作っている人格だろう。

エルとこの部屋にある玉座を交互に見比べ、精霊界での階級を思い出した。

精霊界の地位はピラミッド。下級になるほど数が多く、上級になるほど数が少ない。そして、上級精霊でさらに上位の者は王という地位がついている。

今私の目の前に居るこの精霊は、精霊界で玉座に座れる者。——
——おそらく精霊王と名前の付く……。

「……今のエルは、アンタが無理やり作っている『エル』なの？
いつもの飄々としたアンタと、射殺す様な瞳を持つアンタとどっちが本当の『エル』なの？」

フッフ、と妖しげに笑いながら「……さあ？」と首を傾げる。

「——その答えはメイさん自身が知ってるでしょう？ 貴女にか

けた数々の呪い……。ああ、時間そうですね。」

彼の言葉を聞いていると、突然体が強い力で引っ張られた。きっと、この魂の状態が自分の体に引っ張られているのだろう。

エルは遠ざかって行く私を見ていた。そして、妖しく微笑みながらも剣呑な視線を放ち、一つの言葉を私の心に残した……。

「——お前は、俺の心を一時でも動かした。」

解かれた一つの呪い・後篇（後書き）

お疲れ様でした！

一位精霊王の心（前書き）

更新に随分間があいて申し訳ないです。

また、お気に入りにとくさんの方が登録していてくれて、とても嬉しいです！ありがとうございます！！

一位精霊王の心

メイが居なくなり、静まり返った薄暗い広間に彼女と入れ替わるように一体の精霊が現れた。

エルは立ちつくしたまま、気だるげに視線を気配の方へ向ける。

透き通るような白磁の肌。深緑と黒の入り混じった肩で切り揃えられた髪。上級精霊だと容姿と気配で知らしめる、体軀からあふれ出る魔力と、性別が判らない程整い過ぎたその美貌。

「……エンジュか。」

名を呼ばれたエルの側近であるエンジュは、自分の主の前に膝を折り頭を垂れた。

「はい。――我が主。歩く貴方を拝見し、安心しました。」

エンジュは一言口上を述べると立ち上がり、完全回復とは言い難い青い顔をしている自身の主を見て、溜息をつくとやや眉を下げた。

「エル様……、歩けるほど回復してはいる様ですが、まだ真っ青な顔ですよ？もうしばらく玉座で根っこを生やしたように座って、椅子から魔力を貰ったらいかがです？」

また倒れられても面倒なんですよね、と大きな溜息を数回と余計なひと言を付け加えた。

主を見ると、青い顔をしながら何故か一か所をずっと見ている。いつもと同じ無表情ながら、瞳は僅かに優しげに細まっている。

主を召喚士の元からこちらに連れてきて六日程が経った。

最初の三日程はどうしても起き上がれないらしく珍しく寝台に横になっていたが、体力は回復したらしく、後の三日は玉座で魔力の補填ほてんをしていた。

この玉座はとても優れた椅子である。ただの金の大きいだけの椅子に見えるが、この椅子に座ると何故か魔力が自身の体に満ちてくるといふ優れた物である。しかし、この椅子に座れ、かつその恩恵にあやかれるのは一位精霊王という称号を与えられた者のみ。

一位精霊王とは、この精霊界に於おいて四人いる精霊王の内、一番魔力が高く強い者を指す。所謂人間で云う王にあたる。いわゆる

精霊という者は人間と違い、時間が流れない。時が流れ始めるのはある条件を満たした時である。精霊王も例外なく、時が流れる事は無い。一番魔力が強い体躯で時が止まり、再び時間が流れ始めるまでその容姿のまま過ごす。

エンジュは、二百年という長い時間を一位精霊王として君臨し続けている自身の主を、二十年前に次期精霊王になるべく側近になった時からずっと傍で見ている。いつも表情が変わらなく、喜怒哀楽がないのだとすら思っていた。

だが十年ほど前だろうか……。二位精霊王まで使役し、時間を流れさせ退位に追い込んだ女召喚士が死んでから主が感情を表すようになったのは。

十年前のあの日、精霊界に走った強い思念に呼び出されたのは我が主だった。呼び出された後帰還した主は怒り狂い、この城に住まう者達を手当たり次第、血溜まりに変えていった。このままでは精霊界の均衡が崩れると危惧した新しい精霊王達が止めに入った程だ。もの凄く嫌な記憶として、未だ脳裏に残っている。

数年経ち、落ち着きを取り戻した主は時間をみつけては一人の少女を見に行くようになった。時

折威圧的な気配が和らぎ、その瞳が細く柔和な物に変わる瞬間を一目見た時に察知した——この小娘があの思念と飛ばし、エル様を呼びだした者だと。

それからさらに数年が経ち、主は何故か側近である私の表情や口調を真似て、あの小娘と話す様になった。私が、小娘が死んだ女召喚士の娘だと気付き、主に何度も「捕まりたくなければあの娘に関わってはいけない」と進言したが、聞きとってはもらえなかった。

主がああるじの娘に捕らわれるのを望むのなら自分は後押しし、自分になりたくない精霊王の名を冠そうと覚悟はしている。だが、主は自分あるじがどうしたいのか判らないようだ。

主がああるじが最も禁忌とする、水に触れるという行為をしてまであの娘を助けたというのに……。

主は水あるじに触れると魔力が一気に消費されるという、特異な体質を持っている。精霊は魔力で命を繋いでいる。つまり、命を掛けてまであの娘を守ったのだという事に本人は気付いていないのだろうか。

エンジュが言葉を発さない為、広間には沈黙が長い時間流れていた。その沈黙を破るように、エルが口を開く。

「俺は一時でもアレメイに心を動かされた。一度だけでは無く何度も……。」

エンジュは、主あるじが自分の気持ちに気付き始めているのに目を見張った。

普段から喜怒哀楽が表情に出ない主の顔が、今は眉間にしわを寄せ切なさを漂わせている。

「……っは！——貴方がそんな顔なさるなんて、意外ですよ。ああ、前にもありましたね。珍しく笑ってましたっけ？」

めったに見れない表情を見て、乾いた笑いが口から出る。主に仕え出して早二十年が経ったが、先の十年位はこの無口で無表情な精霊王エアリエルに辟易としていた。だがいつしか女召喚士が現れ精霊王達の交代劇があり、その召喚士も死にその娘が目の前に現れた。そこからこの主あるじは面白く変わった。感情が現れ出したのだ。

「——ああ、すみませんね。話が逸れてますね……。私から見るに、エル様——貴方は何時メイもあの娘が前に居ると心が動いてますよ。……見ていて面白いほどに動きまくりですね。今だから言えるんですが、他の精霊が娘の傍はべに侍れないように呪いを施した時なんかは、独占欲強すぎて陰で嘔き出しましたよ。……ぶっふふふ。」

何年か前に主あるじが娘メイの前に顔を見せた時の事が思い浮かび、思わず嘔き出す。主は腕あるじを組み顔をこちらに向けると、ポツリと呟いた。

「お前を振り回す者を生みだす者の元へ行く。……成程。」

「——はあ？何ですか、ソレは。勝手に納得しないでくれますか？」

エルは何やら納得したようで、すっきりした顔つきをしている。
エンジュを見ながら、企み事をするように妖艶に笑むと口を開いた。

「昔の事だ。前の精霊王二人がアイリスについた所以^{ゆえん}だ。――それより、ヒュドラに近いうちにお前が解いた一つの鎖の札に行くと伝えてくれ。」

絶対零度の微笑みともとれる笑みで告げられた一言に、背筋に少し寒気を覚えながらエンジュは元精霊王ヒュドラの元へ急いだ。

一位精霊王の心（後書き）

お疲れさまでした。

感想、誤字脱字等ありましたらご一報くださいませ。

それでは、次回もご覧いただけましたら嬉しいです！（^^）！

虹（前書き）

更新が随分遅くなってしまい、申し訳ないです。そして、たくさんのお気に入り登録ありがとうございます！もの凄く嬉しいです！！

今回から、過去編が始まりました！

虹

鳴りやまない雷鳴と視界を遮るような豪雨の夜に、精霊界を騒がせた二つの魂が天へと飛んだ。翌朝には二つの魂が無事に天へと到着した事を知らせるかの様な大きな虹の橋が大地に掛かり、幻想的な風景を醸しだしていた。

大きな虹が掛かり朝露に輝く大地に、重々しい空気を纏った集団が王都にある屋敷に向かっていた。

黒塗りの二台の馬車にたくさんの司祭たち。そして、その馬車の周囲を守るように黒い甲冑を着こんだ騎士や黒のローブを頭から被り表情を見せる事のない魔道師達。

集団は屋敷前に止まると二つの馬車から棺を運びだした。二つの棺を悲しみの中迎え入れた女性の傍らには、五つにも満たない少女が居た。少女は棺の中に横たわる男性と女性を見て困惑の表情をした。

「なんで、こんな狭い所に母様かあさまと父様とうさまが寝てるの？ 直ぐに起きる？」

その言葉を聞き、少女の隣に居た女性は目にたまった涙を流しながら、彼女の事をきつく抱きしめた。そして、その口からは少女に言うというよりも自分に言い聞かせるかのような言葉が紡がれた。

「もう……、起きないの。メイちゃんの母様と父様は、神様の所に行っちゃったの。」

その言葉を聞き、少女の両親譲りの榛色はしばみいろの瞳から涙が流れ出た。一つ、また一つと少女の丸い頬を伝い涙がハラハラと床に落ち染み

をいくつも作る。そして、口からは両親を呼ぶ悲痛な叫びが放たれた……。

両親を泣きながら呼ぶ少女を抱きしめ、涙が止まった女性は二つの棺を見た。

棺の中に眠るように横たわる少女の母親の指から指輪を抜き取り、隣り合う棺の中に眠る父親の服に縫いとめられていた黒い石を指輪を持った手と反対の手に持ち、精製魔法を使い一つの指輪を作った。

そして指輪を少女の小さな掌てのひらにのせ、女性は優しく抱きしめた。

「この指輪を持っていて。母様と父様がきつとメイちゃんを守ってくれるから……。」

少女は両親の魔力がこもった指輪を手にくくりと頷くと、泣き疲れたのか女性に抱きしめられたまま浅い眠りに意識を委ねた――。

大地が裂けるのではないかと思うほどの雷鳴の轟く夜、二つの稀有な魂が天へと流れるのを精霊界の王であるエアリエルは玉座から

静かに見ていた。

流れた二つの魂は、精霊界を束ねる四精霊王の内、三精霊王を交代させる原因を作りだした女召喚士アイリスと、彼女の傍にいつも居た元王族のグラティス。

グラティスは昔、赤子だった時に自分が祝福を受けた者だったか……。ぼんやりと玉座に座りながら、無感動に外を眺めていたエアリエルに声が掛かった。

「今のは……。女召喚士と……。その金魚のフンじゃなかったですか？」

「……………」

「わっ！無視ですか……。少し反応してくれるかと思ってわざと『金魚の〜』と言ってみたんですがね。」

「……………」

「……………フンッ！またシカトですかっ！面白くないですね。自身の側近と会話すらないなんて。……。ああ、私って可哀そうな精霊ですよええ。こんな無口無感動の人形と一緒に居なきゃいけないだなんてっ！」

玉座につながる階段の下に居る、側近であるエンジュはブツブツと言いつつも腕を組みながら体を窓の方へ向け外を見た。斜め横に傾いたその横顔はよく見えないが、心なしかその顔からは天へと流れた魂を想う寂しさが窺えた。

「…………あの二人がこの精霊界を引っかき回したお陰で、とても忙しい毎日が続きましたがそれも終わりましたね。…………二人はいつか精霊界の重鎮方に殺されるものだとばかり思っていましたか、違いましたね。さすがの女召喚士も本物の魔王には勝てなかったか……。」

外を見たまま普段では見せる事の無い哀愁の気配を漂わせるエンジュにほんの僅かばかり驚く。

玉座に座り、目を閉じながらエンジュの放つ言葉にしばし耳を傾けながらどこか胸に空いた穴がある事に気付く。

この穴は数回しか会ったことのないアイリスを想っての事か、それとも我が力を祝福として送ったグラティスの事を想ってか――。

どの位目を閉じていたのだろうか。エンジュの「主、珍しく虹の橋が掛かってますよ」の呼びかけで瞳をゆっくりと開ける。

外には精霊界では珍しい大きな虹の橋が掛かってる。一つだけではなく、いくつもの虹がそこに掛かっている。虹からは微かにアイリスとグラティスの魔力が感じられた……。

――人間にしておくには惜しい二人だった……。

エンジュにつられたのか自分も珍しく感傷に浸り、虹を見ていた時だった。

それは突然起こった。

力のある精霊であれば誰でも気付いただろう。エンジュも組んだ腕が下がり、主であるエアリエルあるじに動向を窺う視線を向けている。

目の前に繰り広げられる幻想的な風景とは違うが、とても引きつけられる感情と虹に混じる魔力と似通った幼い魔力。

——とても強い想いが呼んでいる。

自分が呼ばれていないのは判っていた……。

その想いが呼んでいるのは、先ほど天へと逝った二つの魂。

エアリエルは引き寄せられるかのように、その想いの元へと自らの意思で移動魔法を使った——。

虹に含まれている魔力を従えて……。

虹（後書き）

お疲れさまでした！！

誤字脱字、感想等ありましたらお願いします！

触れた温かさ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！お気に入り登録もしていただき、ありがとうございます！

今回も過去編です。過去との事で、元三精霊王達を登場させてみました。こちらは短編の『魔王』で出てくるキャラクターです。まだ、出てないキャラも此方には出ておりますが……。

最後まで読んでいただけると嬉しいです！（^^）！

触れた温かさ

眩^{まよ}い虹と、その虹に纏^{まと}う魔力を身に帯び一位精霊王であるエアリエルは移動魔法を使った。

少女の悲痛な呼び声に引き寄せられるかの様に、その声が発せられている場所へと――。

移動先はどうやらどこかの部屋らしい。

自分の使用した移動魔法の陣とは別の魔法陣が、部屋を覆い尽くす様に虹色の光で描かれている。感じる魔力は先ほど天に逝った二つの魂のものが混じり合ったもの。

部屋を一回り見回すが、呼び出したらしき者の姿が見当たらない。やや不思議に思っていると……足元に、泣き過ぎて目が真っ赤になった一人の幼女が失望感に彩られたその瞳を潤ませながらも、こちらを見上げていた。

おそらく五つにもなっていない小さな娘。自分が引き寄せられた相手がこんなに幼い幼女だとは思いなかった。今まで精霊王である自分と呼ばたのは、最高召喚士や王族達などそれなりに能力を

磨き続けた年老いた者達だった。呼び出される時も、なにかの便利な道具の如く扱われる。

若い人間で一位精霊王を呼べた例外は、魔力が人間にしておくのが惜しい程有る、若い女召喚士のみだった。彼女はエアリエルの事を便利なものとして扱う事はしなかった。なぜか「友達になりたいから使役したい」と言っていた……。変な女だった。

幼女の持つ榛色はしばみいろの瞳と、その身に纏まとう魔力からこの娘が誰の子供かが知れる。成程、両親の残した陣が発動しそこに込められた魔力が、この子供の想いを届ける手助けをしたのか。——だが、自分の矜持がそれを許そうとはしない。ただの幼児に精霊王が引き寄せられたとあっては示しがつかない。まして自分は精霊界をまとめる者だ。それを表すかの様に、幼女に向かい普段よりも威圧感のある低い声が放たれた。

「——何の用だ。アイリスとグラティスの娘。」

ビクリと小動物のように体を震えさせるが、怯えの色が色濃く出た瞳は逸らさずこちらを向いている。小さな口は小刻みに動き、微かに聞き取れる声が発せられた。

「……っ。こんな怖い人、神様じゃない。……メイはいい子にするから、だから……、起こしてって神様をお願いしてたの……!」

止まっていた涙が堰せきを切ったかのように溢れ出た。次から次へと止まることなく幼女の頬を伝い筋となり流れ落ちる。

「……確かに、俺は神ではないな。だが、誰に願っても無駄だ。お前の親はもう起きない。——天へと逝った。」

その言葉を聞いたせい、幼女は声をあげて泣き出した。

「……ふえっ。……メイも父様と母様の所に行きたいよっ！」

「……うるさいっ！ 無理だ。……生きている者は行けない。」

泣きじゃくる幼女は一喝され驚き、声を殺し静かに泣いていたが、しばらくすると落ち着いてきたのかポツリと呟いた。

「……怖いお兄ちゃん。……もしかして、お兄ちゃんがエアリエル？ 母様がお話してくれた精霊の王様？」

微かに聞き取った自分の名前に体が反応して動いた。

風魔法を使い、幼女を自分の視線まで持ち上げるとその視線で射殺すかのように睨んだ。

「……そうだったら何だ。お前も俺に何かを望むのか？」

いきなり持ち上げられ、すぐ目の前に迫る双眸に怯えつつも、瞳を逸らすことなくエアリエルを見つめる二つの穢れのない瞳。

「……うん。」

「……精霊に願いを言う時は、代償が必要だ。……エアリエルに願うのなら、お前の一番の者を差し出せ。」

『一番』と聞き、その瞳が揺らぐが幼女は視線を逸らすことなく「一番はダメ」と言い放った。そして、ポケットから一つの指輪をとりだすと、エアリエルに差し出した。

「一番は父様と母様だから、ダメなの。……でも、これはさつき叔母さんがくれたメイの宝物なの。」

怯えからか穢れの無い両の瞳に涙が滲みだし、幼女は鼻をすすり

ながらも必死に言葉を紡ぎだす。

「……起こしてくれないなら、メイはお別れがしたいのっ。父様とうさまと母様かあさまが大好きだから、……だから大好きだよって言うってお別れがしたい……。母様が、精霊の王様は何でもできるって言うってたの！」

エアリエルは衝動的に少女の頬に流れ落ちる涙を指で掬すくった。少女は無表情に手を伸ばし頬に触れる指に、ビクリと体を震えさせた。

温かい雫に触れた指先が熱を運び、エアリエルの心の中に波紋が生じた。

その熱は直ぐに冷たくなり、また温かい物に触れなくなった。そしてその榛色の瞳から流れる穢けがれのない雫を指先に絡め続けた。

……何だ？この感覚は……。

先ほどの心の中で生じた波紋が大きくなり、得体のしれない感情に吞まれそうになりエアリエルは恐怖した。

そして、その事を隠すかのように少女の首を掴み、自身の魔力を込めた。

「このエアリエルという名に賭け、……メイ、稀有けうなるもの達の娘よ……。お前の『願い』を天へと届けよう。だが……。指輪だけでは足りない。お前の魔法を貰おう。——これから先の未来、この喉から放たれる呪文は打ち消され続ける。」

その言葉と共にメイの喉に封印の呪いがかけられ、胸にはその呪いを強固な物にするため、鎖が雁字搦がんじがらめにかかった鍵が埋められた。

同時に二人の周りに緑の風が吹き荒れ始め、その風は屋敷中を巡った後全ての窓を開け放ち空に向かって流れて行った。

メイだけではなく屋敷中に居た者達の心を乗せて……。

吹き荒れた風が無くなり、静寂が戻ってきた。

部屋には封印の影響か、ぐったりと意識を無くしたメイがエアリエルに抱え^{かか}られている。

エアリエルは部屋を見回し、一部始終を見ていただろう三つの気配に話しかけた。

「……お前達、何をしている？」

冷えた一瞥^{いちべつ}を気配のある方向へ向けると、それぞれに水、地、火の属性を纏った眉目秀麗な男女の精霊が現れた。

水の気配が濃く出ている蒼い精霊が前に出て、意識を失ったメイをエアリエルからはぎ取るように奪い取る。

「——返せ、エアリエル！俺のメイだぞっ！」

「そうじゃ、お前なんぞにこの子を抱き^だ抱^{かか}えるなんぞ勿体ないことじゃ。」

「……よし。これで出会いは果たしたな。」

蒼い精霊がメイを抱え込み愛しそうに瞳を細めるのを横目で見ながら、エアリエルは先ほどもでこの腕の中に居た少女の温もりが消えていくのを寂しく感じた。そして、感情の波紋が一段と大きく揺

れた気がした。

「アイリスの命令が無かったら、さっきもメイの魔法を封印される前にお前の手から助けれたのにつ！」

優しくメイの頭を撫ぜる蒼い水の精霊に加担するかの様に、眩いまよめ金の髪をした地の精霊が腕を組み、持った扇子で顔をトントン叩き、傲慢な態度でエアリエルと向き合った。

「——アイリスの命は絶対じゃ。『メイが危機に陥るか、貴方達の存在を望むまで姿を見せるな。自然に死が訪れるまで守れ』難儀な命令であろう？だが、我らに時を与えた主の最後の願いじゃ。聞かんわけにはいかん。今ここに現れたのは——」

橙色の髪をした小柄な火の精霊が地の精霊の言葉を繋ぐように語りだす。

「エアリエルとメイの『出会い』を見る為や。ま、興味半分だけど。ウチの出した託宣が当たるか見る為には欠かせん事やろ？」

火の精霊の言った言葉で、この精霊達が自分の前を去った時の事が思い出され、エアリエルの脳裏をよぎった。

『エアリエルを振り回す者が生まれる』

エアリエルがそう思った時、心が読める能力を持つ水の精霊がエアリエルと似た容貌で、含みを持たせるように笑った。

「よく覚えてたね？その頃もう俺はアイリスの傍に居たからよく知らないけど、此処に居る二人はよくそう言ってるよ。……俺はあまり信じて無かったんだけどさ、今のお前の顔を見ると当たるかもって思う。」

「ふっふっふっ。愉快じゃの。出会いでその表情か。無表情のお前がこの子を手放され、寂しそうな顔をしておるぞ？」

「うんうんっ。先が楽しみやな。」

静かに会話を聞いていたエアリエルが顔を手で覆い、ポツリと呟いた。

「……寂しい？そんな筈はない。」

今ある感情は、得も言われぬ感情だ。言葉では言い表せない程の。そして、その感情に満たされる事に恐怖感を感じている自分への苛立ち……。

「もう、その娘と俺が会うことは無い。」

水の精霊に抱えられて^{かか}いる幼女を一瞥^{いちべつ}すると、宣託を下した火の精霊にそう言い放ち踵^{きびす}を返して移動魔法を発動した。

「エアリエル。——お前は自ら^{みずか}メイに会いに行くで？必ずな。」

後ろから聞こえた火の精霊の一言を聞き流し、エアリエルは自らの居城へと帰った。

そして、聞き流した筈の一言が頭の中から離れずに、苛立ちが募っていった……。

触れた温かさ（後書き）

お疲れ様でした（＾―＾）

関西弁キャラを書いてみたくて、出してしまいました。実は、関西弁……大好きなんです（＊＾―＾＊）

作者は関西弁は話さないの、方言が変！と思われた方は是非ご一報ください。すぐに直しますの！

波打つ感情（前書き）

ご覧いただきありがとうございます！

今回は若干R15を含みます。（スプラッターな意味で）かなりぬるいですが……。

波打つ感情

幼い娘——…メイから天へ親への思慕を届ける代償としてもらった黒い指輪を手にも、精霊界の王であるエアリエルは一人窓辺に佇んでいた。

メイの涙に触れた時の妙な感情と、その感情に満たされる事への苛立ちを抱えて。

その苛立ちを発散したかの様に、エアリエルの周囲には血臭を放つ精霊だったモノ達が千切れ飛んだ手足や臓腑を晒しながら散らばっている。

「はあゝっ。……エル様。向かった先で何があったのか聞きませんけどね、近づいた者達を片っ端からこんな状態にするのやめてくれます？片づける者の身にもなってくださいよ。……それに、こんな事を続けていたらこの居城で仕える者達が居なくなりますよ？」

手巾で鼻と口を覆いながらエアリエルの側近であるエンジュは、空いている方の手を薙ぎ払い散らばる死体を転移魔法で死体を好んで食べる魔獣が棲む森へと飛ばした。

一息つき、エンジュは主人であるエアリエルの方を向くと、部屋をこんな惨状にした本人は視線だけで答えた。切れ長の瞳に合わせ、整っている眉を顰めた。

「……なんですか？そんな簡単な事でグチグチ言うなって顔をしていますね。……はあっ。一日にこれで何度めですか？今朝、貴方が帰ってきて直ぐから数えて十回目ですよっ！これが夜の帳が下りる時間だったら、まだ我慢できますが未だ日は高い位置にありますよねっ？この居城に居る者達を全滅させるつもりですかっ？！」

開け放った窓を見ながら太陽に指を指し、普段よりも血色を増した端正な顔に青筋を浮かべエンジュは主人に言い募った。それでも窓辺に佇み続け、手の中にある指輪を見つめるエアリエルは反応をあまり見せなかった……。

「……っ！エル様っ！聞いてますよねっ？ずっとその指輪ばかり見てるんじゃないですよっ！何なんですかそれは！貴方を狂わせる呪いの指輪ですか？！」

エンジュの放った一言にエアリエルの肩が僅かに揺れ、聞き取れるかどうかの微かな声で呟いた。

「……呪いか。そうかもしれんな。」

グラティスの胸元に輝いていた、彼の魔力の籠っている魔法媒介の石。

アイリスがグラティスから渡されたと言っていた、彼女の魔力の入る金に輝く指輪。

四精霊王の内、三精霊王を交代に追い込み、精霊界を混乱に陥れた二人の物が混じり合った産物なら『呪いの指輪』と言っても過言でもない。

エアリエルの言葉が聞こえなかったのか、エンジュは人の話を聞けとばかりになおも捲し立てている。

「はあっ？！何かいいましたか？大体ね、貴方は声が小さすぎるんですよ！表情筋が固まってるんだから、声位ちゃんと出してくださいよっ。——ああっ、話が逸れちゃったじゃないですかっ！貴方の手の中にある指輪に呪いが掛かってるんなら捨ててくるんで渡してください！！！」

早く、と急かすエンジュの掌を風の矢で貫き、痛がる側近を横目

に玉座まで歩き腰かける。瞳を閉じると、エンジュが何やら怒っているが全く気にしないエアリエルに背をむけ部屋を去って行った。

———指輪コレを見ていると、心が揺らぐ。だが、……手放さない。

* * *

この指輪を見ていると理由も判らず、苛立つ。

苛立てば、傍に居る者を引き裂けば気分が幾分か落ち着く。そんな考えで何日が経過したのだろうか。最近俺に殺されるのが怖いのか、誰も近づかない。———エンジュでさえ……。

だが、珍しく誰かの気配がした。閉じていた瞳を開くと、自分と似た顔だが色が違う者が居た。

アイリスが現れるまで、俺の傍にいつも居た元水の精霊王ヒュドラ。

そこに散らばる精霊だったモノと部屋中に漂う血臭と腐臭に怒っているのか、ヒュドラは拳を握り肩を震わせている。

エアリエルは億劫そうに口を開いた。口を開くのも幾分振りだろ
うか、声はかすれていた。

「……何の用だ？」

ヒュドラは普段は蒼い瞳を充血させて、玉座に気だるげに座るエアリエルに近づくとその胸倉を掴み、殴り付けた。

鈍い音がし、エアリエルの口元が切れたのか赤い血が筋を見せる。頬も赤くなっていたが、口もとの傷と同じで直ぐに何もなかったかの様に元に戻った。

「——お前は何をやってるんだよっ！！俺の後継が助けを求めてきた。……『一位の気が触れた』とな。」

胸倉を掴んだまま、ヒュドラはエアリエルの掌の中にある指輪に目を留める。指輪から漂う今は亡き二人の魔力を感じ、合点がいくとばかりに彼の顔を見た。

「ついてこい」一言エアリエルに言うと、胸倉を掴んだまま移動魔法を使い精霊王の居城を後にした。

移動魔法の陣が王都から離れた田舎にある森の中に現れた。水の属性を多く含む陣は青く発色し、直ぐにかき消えた。

エアリエルはどこか懐かしい景色だ、と思い辺りを見回した。

「——ここはスツツエだ。お前がアイリスと初めて会った場所だよ。まあまあ楽しい思い出の場所だろう？……だけどな、此処に連れてきた理由は思い出話を語る為じゃない。」

ヒュドラはエアリエルから離れると、「ついてこい」と言い歩き出した。

少し歩くと、学院の近くに出た。

たくさん生い茂る大樹の根元に、一人の少女が丸まるように寝ていた。

「ああ。こんな所で寝るなって言われてたのに……。クソツ、アイリスの命令が無かったら近くに行けるのに……。」

ヒュドラは切なそうに瞳を揺るがせ、両手を握りながら少女——
——メイの傍に行くのを我慢する。

少女の顔には涙が流れた跡があった。大樹の葉で柔らかくなった日差しを受け、泣き疲れて寝てしまったのだろう。

エアリエルは、少女をこの前の子供だと認識すると、自身の指で掬った穢れの無い温かな雫を思い出し、胸の中にある感情が波打つを感じた。

エアリエルの心の内を読んだヒュドラは苦笑した。

「お前は、自分の中にある得体のしれない感情が怖いんだな？」

肯定も否定もしないエアリエルだったが、心の読めるヒュドラに

は彼の考えて居る事がよく判る。苦笑を切なげな表情に変えた。

「……俺もだった。アイリスに会って、よく判らない感情に支配されて行くんだ。——でもさ、時間はかかったけど、彼女を愛してるんだって認めたら楽になった。時も流れ始めたし？ま、グラテイスに負けただけだ……。」

ヒュドラは拳を作り、一心にメイを見ているエアリエルの胸をついた。

「お前は長い間玉座に縛りつけられ、感情を持て余す不器用な奴だが、心は正直だ。……時間を掛けてもいい。まだ漠然として固まっていないその感情を認めろ。——そうすれば楽になる。」

ヒュドラの言葉が心に届いたのか、波だっていた感情が凪いだ。
快晴の青空の下、澄んだ空気を思いっきり吸い込んだかのような爽快な気分になり、目を閉じ頭を一度縦に振った……。

それからはメイの封印監視を兼ねて、誰にも見つからないように彼女を見るようになった。

何年経とうが、この感情の名前は判らないが、メイが笑う姿、親を想って無く姿、怒っている姿をみるとなぜか気持ちが悪く落ち着いていった。

やがて彼女が精霊使いを目指すと知り、他の精霊が彼女の傍に侍るのを許せなくメイの前に姿を現してしまうのだった——……。

波打つ感情（後書き）

お疲れ様です！

エルの『初めての感情』の揺らぎに恐怖するという、難しいテーマだったんですが、ヒュドラがうまく説明できていたでしょうか？文章力があまりないので伝わったか心配です。――へ；

次回からは、やっとメイが主役に戻ります☆

愛しい感情（前書き）

やっと、恋愛に戻ってきた気がします。

うまく書けなくて、すごく長くなってしまいました……。。

愛しい感情

メイの姿を見始めて十年が過ぎた。

その間、俺はあの波立つ感情をメイに「エアリエル」と名を呼ばれた事により、自身が縛られた事だと結論を出した。使役されるまではないっていいないが、顔を定期的に見なければ何故か苛立つ。どう考えても、名前を縛られたとしか考えれない。

幼女にそんな能力があるのかと疑問にも思うが、あのアイリスとグラティスの子供だ。そうで無ければ納得ができない。それに、指輪という魔法具まであった。……あの二人の魔力付きのだ。

十年の間に何度も魔法を使おうと、努力をしていたようだが無駄な事だ。あの時の封印は壊れない。

メイは十五になり、精霊使いを育成する学校に通い出した。

彼女の周りにはいつもべったりと下級精霊達が居る。いつか、メイはこの者達から使役する精霊を選ぶのだろうか。

今日もメイはたくさん火の下級妖精と一緒に居る。小さい下級精霊達はメイに火の魔法を扱えるように教えているようだ。朝から始まって、今は西日が森を照らしている時間だ。どんなに教えようが時間をかけようが、無駄な事——俺のかけた封印が直ぐに魔法を打ち消す。

日が沈み始めた頃、一体の小さい火の下級精霊がメイに自分を使

役してくれと訴え出した。

「メイ、私は貴方を助けたいの。魔法が使えないのなら、私がメイの魔法の代わりになるよ!……それとも私じゃ、弱すぎるからダメなのかなあ。」

メイは、目の前で肩を落とし項^{うなだ}垂れる精霊に瞳を潤ませ、手を胸の前に組み感激している。

「……ありがとう! すごく嬉しい!!」

二人のやり取りを遠目から見ていて、心の奥底に過去にあったような波立つ感情が湧き上がってきた。

いつもなら顔を見るだけで呾いだ気持ちになっていたが、今はメイと彼女に侍ろうとする精霊を見ると苛立ってくる。

こんな場所で魔力を爆発させてはいけない。苛立ちが自身の纏う魔力を増幅させるが、ギリギリと歯を食いしばり、なんとか自分の力を抑える。

だが、抑えきれずに周囲に漏れだした魔力を下級精霊達は敏感に感じ取り、辺りを見回し上級精霊であるエアリエルを見つけると、メイに何も言わずに逃げ去った。

いきなり全員目の前から消えた精霊にメイは「えっ?! なんで?」と素っ頓狂な声をあげていたが、暫く待っていても現れない精霊を諦め、一人で再び魔法の練習を始めた。

どれくらい見ていたのだろうか……。日が沈み、空には星空が浮かんだ。新月なのか月が出ていない為、辺りは漆黒の闇に閉ざされている。近くで羽ばたく鳥の羽音で我に返ったのか、メイは急いで帰り支度をして走り始めた。——何故か彼女が本来帰るべき場所と反対の方向へと……。

放っておこうと思ったが、何故か体が自然に動きメイを追う。メイの事になるといつもそうだ。体が意思に従わず勝手に動いたり、わけも判らずイラつく事がある。

体が勝手にメイを追いついて始めてどの位経っただろうか……。メイはいきなり立ち止り、しゃがみこんだ。何をやっているのかと訝しんでいると、すすり泣きが聞こえた。

……まさか道に迷っているとは言わないだろうか？

遠目から見るメイの泣き顔を見て、昔この指で掬った温かな雫を思い出した。

——今のメイの頬を伝う涙も、あの時と同じ温かさを含んでいるのだろうか……。

触れてみたい。そう思った瞬間、何故か体が勝手に動き、気付けばメイの前に屈みこみ涙を掬い取っている自分が居た。

「——えっ……?!」

自分の体が勝手に動いた事に驚いたが、瞳が顔から零れ落ちんばかりに目を見開いているメイの顔にもっと驚いた。

目の前にあるメイの表情は、目を見開き時が止まったかのように固まっている。——それはそうだろう。泣いていたらいきなり目の前に見知らぬ人（精霊）が現れて、自分の涙を拭いているのだ。驚かない方がおかしい。

俺は焦るといった事を経験したことがない。だが、この時は初めて『焦る』とい事を経験した。こんな時はどうすればいいのか判らないのだ。――こんな時、口が達者なエンジュが居たらどんな言葉言っているだろう……。そう思ったら、口からスラスラと言葉が出てきた。

「こんな山奥で、なぜ泣いているんです？もう遅い時間ですし、帰った方がいいんじゃないですか？」 苦し紛れにエンジュがいつも作る笑みを真似てつけ足した。メイは暗闇でもわかる程顔を赤らめた後ポツリと言った。

「……魔法の練習をしてたの。」

とりあえず会話をする気になったようだ。よし、これからはエンジュを真似てみよう。

「ああ、それでこんな時間につ！」

聞かなくてもずっと見ていた為、判っているがエンジュの様に大げさに相槌を打つ。だが、少し大袈裟すぎたようでメイが眉を寄せ訝しむ仕草をする。

「……そう。」

メイの瞳が「アンタ誰？」と語っている。だが、エンジュなら見ている事にするだろう。無視だ、無視……。

「――で？こんな山奥で何をしていたんですか？」

エンジュがいつもやるように首を横にかしげ、人を小馬鹿にするような仕草を真似てメイを見る。

メイは、「迷った」と素直に言うのが恥ずかしいらしく、顔を赤らめて口元をモゴモゴと動かしている。

俺を見ては視線を外し、また視線を戻すと言う事を繰り返していた。その顔を見ていると笑いがこみあげてきた。

「……言えない事をしていたんですね。帰っちゃいましょかねえ？」

笑いを堪えるために立ち上がり、彼女に背を向け帰るふりをする。と服の裾をメイが掴んだ。そして、思いつき引き張り「行かないで。」と半ば叫ぶような声が聞こえた。

振り返ると、顔全体が真っ赤に染まったメイがエアリエルを見ていた。

「……道にまよっちゃったの。」

先ほど俺を引き留めた声とは真逆のか細い声で言い終わると、叱られた子供のような、バツの悪そうな顔をして視線を横にずらす。

その瞬間、先ほど我慢した笑いが、抑えきれなくなり噴き出した。しゃがみ込み、我慢していた笑いを放出する。

「——ふっ……！くっくくく……！はっつ、はははははははは……！！迷子になる年齢じゃないだろう！！」

どれくらい笑っただろう。……あんなに笑ったのは随分と久しい。笑い過ぎて腹が痛くなったのは初めてかもしれない。メイを見ているといろいろな感情が湧いてくる。——俺の名を縛った者だからだろうか……。

「……ふふふ。久しぶりにあんなに笑いました。お陰で、何やら

すっきりしましたよ。あなたと居ると楽しいですね？迷子のお嬢さん。」

「くっ！何もしてない気がするけど。すっきり出来て何よりね……？」

馬鹿にされたと思ったメイは引きつった顔をしてこちらを見ている。心なしか、目が据わっている。

メイはずいぶん感情豊かな娘に育った。もっとメイの色んな表情を見たい。誰よりも傍で……。そう思うのは縛られているからだろうか？

だったら、傍に居ようじゃないか。昔かけた呪いが解けないように監視しながら、メイの命が果てるまで傍に居て、楽しませてもらうじゃないか。

メイを見ながら、人間を虜にする妖艶な笑みを浮かべ口を開く。

「——決めました。貴方を私の妻にしましょう！あんなに笑わせてくれるのはあなた以外居ないです！！」

——そう、そしてお前も俺以外の精霊は要らない。俺はその他大勢と同じでは嫌なんだ。

気付けば、メイに俺以外の精霊が寄りつけない呪いをメイに施していた。呪いを自分の唇にのせ、メイのそれと合わせる。

メイは頭で処理しきれっていないのか、硬直し榛色に輝くその瞳を見開き息を止めている。柔らかい感触を堪能し、そろそろメイの息が限界かと繋がった唇を離す。

「……口づけの時は目を閉じるものですよ?——メイさん?」

柔らかく、気持ちの良い感触にもう一度触れたくて更に口づけしようとして顔を近づける——、だが二度目は触れることなく触れたのは俺の頬に入り込んだ一発の拳……。思ってもなかった攻撃でよろめいた上体にメイの蹴りが繰り出されるが、間をとりそれを避ける。メイは真っ赤な顔をして、ブルブルと震えながら袖で唇を拭いながらこちらを睨んでいる。

「——何すんのよ……っ!! こんな変態の近くに居られるかあっ!!……帰るっ!!」

早歩きで森の中に消えていこうとするメイの腕をとり、どうやって帰るのかと聞いてみる。

「歩いて帰るんですか?!!」

「魔法が使えないのよっ!! 友達の精霊に道案内位してもらおうから、あっちに行つてよ!!」

「ずかずかと歩きながら「ついてくんなっ! 変態精霊っ!!」と叫びながら、下級精霊達を呼んでいる。」

「………来ませんね?」

傍に居る上級精霊に頼らず、下級精霊を呼ぶなど嫌味を込めてニッコリと微笑む。

「まあ、精霊なんて気まぐれですからね? ふふふ。——仕方ないので、送ってあげますよ。あ、その前に手をだしてください。出さないなら、強制的に手が出る魔法をかけましょうか?」

おずおずと出された掌に、昔メイから貰い上げた黒い宝石のついた指輪をのせる。

メイは金の指輪に黒い宝石の乗っている指輪を見て、驚いた顔をしている。

「これ、父様と母様の魔力の気配がする。なんで？ どうして持っているの？！」

「——秘密です。貴女が手に入るから、コレはもういらないんで返しますね。」

「あんたのモノにならないわよ！」と憤慨するメイの頭に手を当て、妖艶に微笑みながらこの指輪を渡した時の記憶を時間魔法で抜き取る。そして、この指輪はメイの魔法媒介だという記憶を刷り込んだ。

そして、記憶操作で意識を失ったメイを抱きこんだエアリエルは、この腕の中に眠る彼女を愛しく思い始めているのに気付かず、単に名前で縛られているだけと決めつけ、数年後に自覚した時に苦労するのだった。

愛しい感情（後書き）

お疲れさまでした！

今回で過去話は終わりです。うまく書けなくて、何度も推敲を重ねたつもりだったのですが、どうだったでしょうか。

次回から、現代のお話に戻ります！やっと恋愛ものが書けるので張り切ってます（＾―＾）

オルガの告白（前書き）

たくさんの方々にご覧いただき、いつの間にか120000PV突破しました！130000PV目前です☆
ありがとうございます！

オルガの告白

窓と扉には外から誰かが入ってこないように内側から鍵を掛け、部屋の中の話声が外に漏れないように結界をかける。念には念をという事で、部屋の四隅には結界を強固にするために結界石を置く。

部屋の中には、この部屋を魔法と精霊の研究の為に使っているメイとオルガが、円卓に向かい合うように座っている。

「もう調子はいいの？……魂駆けした影響でずっと寝てたって聞いてたけど。」

オルガは心配そうに向かいに座るメイの顔を覗き込み、その琥珀色の瞳がメイを映している。

メイは向かいから真っ直ぐに向けられる視線をうけて、顔を赤くした後コクコクと縦に首を振り、肯定を表す。そして、真剣な表情をしてオルガに口を開く。

「心配かけてごめんね。……実は、あの時にエルに会ったの。――精霊の王城で。」

オルガは音を立てて立ち上がり、その反動で座っていた椅子が倒れる。静かな部屋でオルガの倒した椅子の音が響くが、それよりも大きい声を響かせて目を見開きオルガが驚く。

「――精霊界の王城っ！！？何でそんな危険な場所に行ったのさっ？！」

音が出るように勢いよく机に手を付き、身を乗り出すようにメイを見る。

「君の両親が精霊界にした事は聞いたこと位あるよねっ？……恨みを買っていてもおかしくないんだよ？そんな所に一人で——しかも魂だけで行くなんて。悪い精霊達に捕まって戻ってこれなかったらどうするの！！」

普段オルガが見せる柔らかな表情とは打って変わって、般若の様な顔をこちらに向けながら、詰め寄るように机に身を乗り出して怒っている。

今、オルガの瞳の中には困った表情の私が映し出されている。

オルガの言いたい事は判る。

私の両親が……主に母様かあさまが、三人の精霊王を退位に追い込み精霊界を混乱に陥れたのだ。母様本人は混乱させたかったんじゃないと思うけど。

三精霊王がいきなり新人に変わり、一時期は秩序が乱れに乱れたらしい。それを鎮めたのが、残った精霊王とその重鎮たちと言われている。それ故に、精霊界の重鎮達から恨みを買っていてもおかしくはない。

オルガはそこを心配してくれている。とてもありがたい事だ。

精霊王は呼べる人間がめったに現れないことから、なかなか退位する事が無いと言われている。今まで伝えられている史実では、三人も一気に抜けたのはこの国の始祖王以来の事である。

この国の始祖王は女神から愛され、女神の助力もあり四精霊王を
使役する事ができた。けれども、私の両親は女神の助力は無いが、
何故か精霊王達を使役する事が出来てしまったらしい。……我が親
の事だけれども不思議でしようがない。

自分の表情が確認できるほど近くにオルガの顔が迫ってる事に恥
ずかしさを覚えつつ、目が覚めたら幽体離脱状態だった事や蒼い精
霊が自分の様子を見に来ていて、その後で何故か精霊界の王城へ行
きエルと会い、忘れていた過去の出来事を話した。——エルが王
座の間に居た事は伏せて。

オルガは話を聞き終わると、瞳を閉じて息を深く吐きだした。
両手を机に付け身を乗り出したそのまま、頭を垂れながら普段
よりも少し低い声音で口を開く。

「……魂駆け^{エル}ってさ、一番行きたい場所に行けるんだ。——君
はどうして……、クソ精霊^{エル}の事を考えたの？」

顔をあげたオルガは琥珀色の瞳を色濃くしながら私の顔を見据え
る。その表情は何かを必死で堪えているようで、とても辛そうだ。
どう答えていいのか判らなくて、言葉が出ない私にオルガは聞き
方を変えてくる。

「魂だけの時にただ考えるだけじゃ、どこへも行けない。——
でも、魂を懸けて本当に行きたいと思えば実行できる事なんだ。…
…だから『魂駆け』って言われてる。……メイはクソ精霊^{エル}の事が、
そんなに好きなの？」

「――えっ？」

確かにあの時はエルの事を考えた。でも、それは一発殴ってやろうと思っただけで……。決して命をかけて会いに行ったわけじゃない。むしろ、そんな事知らなかったし……。

オルガにそう伝えようと思って、何故か口が開かない。エルの事を考えると、玉座の前で見たエルの事を思い出し、心の奥深くで針が無数に刺さったかのように痛くなる。

――これが好きって事なの？

「……判らない。エルの事をどう思ってるかなんて。」

目の前にあるオルガの瞳には、顔を歪ませた私が映っている。

「何で判らないの？いつもメイの事を見てた僕でも判る事なのに。……君がクソ精霊エルの事を話す表情は……。」

私と同じように顔を歪ませてオルガが何か言おうとするが、口を噤つぐみ眉間にしわを寄せて私から視線をずらす。

机から手を離すと、いきなりしゃがみ込み頭を抱えて蹲うすくまった。

「――っ！あああゝ！もうっ！！鈍いにも程があるよっ！！この三年、僕も君の傍に居たのに何で僕の所に来なくてクソ精霊エルの所に行ったの？ねえっ、少しでも僕の事考えてくれたっ？」

一気に捲まくし立てると視線を私に戻し、私とオルガを隔てていた机を横切った。そして、切ない表情を浮かべながら目の前に来たオルガは、不意に私を抱きしめた。

「この一週間、君が起きなくて生きた心地がしなかった。……それにさ、あの蒼い精霊が、君がクソ精霊エルの所に魂駆けしたって言って、悔しかったんだ。何で僕の所に来てくれないの？って。」

オルガの黒いローブ越しに早鐘の様に打つ鼓動が、彼がとても緊張しているのを伝えてくれる。逃がさないと言う代わりに、オルガの腕がきつく私を抱きしめる。

私の耳元に吐息がかかり、囁くように彼のその優しい声音で、全ての気持ちを籠めて告げる。

「メイ、君が好きなんだ。」

オルガの鼓動に重なるように、私の鼓動も自然に早くなる。

「……うん。」

私の乾いた口から紡がれた言葉は、たった一言だった。そんな返事にオルガは耳元で笑うと、私を解放した。

「……それって、どう取ればいいの？……まあ、今は聞かないどくよ。別にすぐに返事が欲しいわけじゃないし。」

「ああー！すっきりした！」と言いながら、爽快な表情で椅子に座りなおすオルガにあっけにとられながら私も座りなおす。

お互いに先ほどの事もありながら、やや緊張しながら真剣に話し始める。

「実は僕さ、クソ精霊エルの正体と蒼い精霊の正体を知ってるんだ。」

——メイも検討付いてるんじゃない？」

「……知ってるといふか、だいたい思い出したの。彼らの名前を言えるほど私の力が無いから言えないけど……。蒼い精霊は、母様の精霊だった。遠目からだけど見た事があるの。エルは——」

「君の親である、アイリスでさえ使役できなかった『精霊王』だよね？」

その問いに私は魂駆けした時に見たエルの居た場所を思い出し是の意味を込め、首を縦に一度振る。

……間違いはないはず。精霊王の玉座に座れるのは一位の王のみ。母様が使役できなかったのは一精霊王だけだし。

オルガはそれを見て、頬杖をつきながら何かを考えるように空いている方の指でトントんと机を弾く。とても真剣に考えている時に出るオルガの癖だ。

「そのクソ精霊が三年ほど前からいきなり君の前に現れたのって、偶然かな？……僕の記憶が正しければ、道に迷って帰るのが深夜になった日だよね？」

「うん。」

「精霊王が、ふらりと山の中に現れる？」

「!!!!!!」

今まで考えた事も無かったけれど、言われてみればそうだ。なんであんな時間に場所に?!

……そうだ、よくよく考えればあの日からだ。精霊達が私から逃げるようになったのは。蒼い精霊も『小さき精霊を弾く呪い』って

言ってたし。もしかして――。

「もしかして、……ずっと見られてたとか……？」

心の中で考えてた事がオルガの口から出て驚く。さっきのオルガ程ではないけれど、私も椅子を倒しそうな勢いで立ち上がる。

「そ、そんなっ！いつから？！……初めて呼び出した時？」

「……多分。」

オルガが困ったように笑いながら視線を私からずらすとポツリと言った「やっぱアイツってストーカー……」と。

オルガの告白（後書き）

お疲れ様でした☆

感想、誤字脱字等あれば報告をお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9437t/>

精霊使いのお願い

2011年11月10日17時10分発行